

基礎発趣論  
(業縁と果報縁)

マハー・ガンダーヨン長老

翻訳 : Paññādhika Sayalay



## 目次

---

|                           |    |
|---------------------------|----|
| はじめに .....                | 2  |
| 第一章 第七講 業縁と果報縁（その一） ..... | 5  |
| 第二章 業縁と果報縁（二） .....       | 30 |
| 第三章 業縁と異熟縁（三） .....       | 41 |



## はじめに

---

### 一、《基礎発趣論》とは何か

《基礎発趣論》は、南伝の七部の論の中の、第七番目の《発趣論》（注1）を源として、それは、（+マハー・ガンダーヨン）長老が、巧みに《発趣論》と日常生活上の経験とを結びつけて、通俗的に解説したものであって、故に《基礎発趣論》となづけられた。《発趣論》（Patthāna）には、四種類の意味・意義がある：種々の縁の意味、分別（=区別）の意味、打ち建てるという意義、趣至の意義、である。

（注1）《発趣論》は、南伝における七部の論書の中の、最も重要な作品である。故に、伝統的に《大論》と呼ばれる。その範囲と内容は、非常に広大で、緬甸語の「第六次結集版」において、5冊分を占めている。

原書編者の序説によると、三種類の《発趣論》がある：

- （1）《広説発趣論》・・・仏陀がトウリ天で天衆に説いたもの；
- （2）《略説発趣論》・・・仏陀がシャーリプトラの為に《発趣論》の大綱を述べたものの。
- （3）《非広非略発趣論》・・・シャーリプトラによる、《略説発趣論》への補充説明。

現在の南伝仏教に伝誦されているのは、三番目の《非広非略発趣論》（以下《発趣論》と呼ぶ）であり、この《発趣論》は、24の小論から成り立っている大論である。この24の小論は、その法の説明の仕方によって、四種類に分類する事ができる：

- （1）順法発趣論。
  - （2）逆法発趣論。
  - （3）順逆発趣論。
  - （4）逆順発趣論
- である。

上述の四種類の発趣論の内には、それぞれ以下の、六種類の発趣が含まれている：

- A、三法発趣論。
- B、二法発趣論。
- C、二法三法発趣論。
- D、三法二法発趣論。
- E、三法三法発趣論。
- F、二法二（ママ）発趣論。

すなわち、順法発趣論を例にとると、六部の小論は：

順法三法発趣論、

順法二法発趣論、

順法二法三法発趣論、

順法三法二法発趣論、

順法三法三法発趣論、

順法二法二（ママ）発趣論

となる。

その他の逆法発趣、順逆法発趣、逆順法発趣は、同様に類推する。合計 24 部の小論となる。注意力の不足している多くの人々は、24 論とはすなわち、24 縁のことであると誤解しているのであるが、実際は、因縁、所縁縁等の 24 の縁は、24 部の小論の中において説明されている所の縁分に過ぎず、それが 24 部の小論と等しい、という事はない。

#### （一）《基礎発趣論》について

1969 年、マハー・ガンダーヨン長老膝下の弟子と居士の方々は、長老に《基礎発趣論》を開示してくれるように願ったが、その当時、時期尚早の為（+実現する事がなかった）。長老の弟子と居士方は、再度長老に申し入れをした為、1973 年 4 月 9 日に、ようやく、法話が開始された。その時の緬甸は、最も炎天の夏であった為、長老は、朝食後の、比較的涼しい時間を利用して、希望者の為に《基礎発趣論》——24 縁を開示した。早朝を選んで、17 回法話した為、当該の書籍は、17 講となっている。《基礎発趣論》は、主に 24 縁について語られているもので、合計 555 ページである。原書は 17 講となっているが、その章立ては、以下の通りである：

第一講：布施波羅蜜、持戒波羅蜜、智慧波羅蜜。

第二講：因縁、所縁縁。

第三講：増上縁、無間縁、等無間縁。

第四講：俱生縁、相互縁、依止縁。

第五講：親依縁、前生縁、後生縁。

第六講：数数修習縁。

第七、八、九講：業縁と果報縁。

第 10 講：食縁。

第 11、12、13、14 講：根縁、禪縁。

第 15、16 講：道縁。

第 17 講：相応縁、不相応縁、有縁、無有縁、離去縁、不離去縁。

## (二) 作者紹介

1900年、マハー・ガンダーヨン長老、緬甸において出生。

1905年、最初の出家にて、沙弥（＝サーマネラ）になる。

1913年、再度出家して、サーマネラになる。

1927年、法師の資格試験に合格。

1941年、長老41歳の時、日本人が緬甸に侵入してきた為、長老は、マハーガンダーヨン寺に避難する。

1950年、緬甸独立後、長老は緬甸政府によって、第一大智者（aggamahāpaṇḍita）の称号・勲章を受ける。

1977年、長老膝下の出家弟子は、500余人に達する。

第六次結集において、法師は以下の四項について、重要な任務を果たした。

- 1、第六次結集の教授阿闍梨。
- 2、第六次結集の三蔵朗読責任者。
- 3、第六次結集のパーリ三蔵の校閲者。
- 4、第六次結集の経典脱稿の最後の校閲者。

法師には、《未来の仏教》《三宝の恩徳》《生活の中のアビダンマ》《私の一生》等の著書があり、往生する5日前まで、執筆活動を行っていたものである。

## (三) 《基礎発趣論》紹介の範囲

《基礎発趣論》の法義は、非常に精彩豊かなものであるが、（+緬甸語から中国語訳の担当者の都合によって）全編を訳出することができない。故に、《基礎発趣論》の「24縁」の内の、最も重要と思われる、また読者が最も関心を寄せるであろうと思われる、17講の内の、第7, 8, 9講、すなわち、「業縁と果報縁」の部分（+緬甸語から中国語に）翻訳して、紹介したいと考える。

### 1、「業縁」と「果報縁」の定義

「業縁」と「果報縁」の定義をする前に、先に「業」、「果報」と「縁」について説明する。一般的には、「業」とは、一切の善、悪、無記の身・口・意における、行為と造作を言う。しかし、仏法上の専門用語として用いられる時、「業」は、思心所、または意志力を指す言葉となる。あなたが何かの行動をする時、一塊の意志の力が、背後であなただけを突き動かしている訳であるが、この、あなたの心理の上に生じた、すなわち、造作された意志力は、「業」と呼ばれる。



## 第一章 第七講 業縁と果報縁（その一）

---

業縁と果報縁

Kammapaccayo ti Kusalā kuslaṃ kammaṃ vipākānaṃ khandhānañca  
Katattāca rūpānaṃ kammapaccayena paccayo//

善また悪の因によって形成された果報名蘊、及び業生色等は、業縁の力に依って完成される。

Cetanā sampayuttakānaṃ dhammānaṃ ca taṃsamuthānānaṃ Rūpānaṃ  
cakammapaccayena paccayo hoti//

思心所は因であり、その思心所と同時に生起する所の諸法と、因となるこれ（思心所）によって、心生色が形成されるが、これらは皆、業縁の力に依って完成される。

善業と悪業とは、善業または悪業を造作する時の、「思心所」を指すものである。というのも、この思心所は、果報を成熟させるからであるが、それはすなわち、皆様がよくご存知の「応報を得る事」である。思心所は、熟した果報名蘊（注3）を支えるだけでなく、種々の因業によって生じた、業生色法（注4）をも支える。たとえば；誰それの法身は非常に良く、美しく、荘厳であるなど等。業縁に関して言えば、果報縁と深い縁があるが、というのも、業は因であり、異熟は果であるからである。故に、このふたつの縁は、同時に語られなければならない。

（注1）略。

（注2）略。

（注3）果報名蘊：果報心とその心所の事。

（注4）業生色法；

欲界18種色法：五淨色（眼、耳、鼻、舌、身）、命根、心色、男根色、女根色、八不分離色、限界色（虚空）。

色界13種色法：眼淨色、耳淨色、命根、心色、八不分離色、限界色。

無想天9種色法：命根、八不分離色。

先に業縁の定義をする。業には二種類ある：「異刹那業縁」と「俱生業縁」（注5）である。もし、すべての思心所を業と呼ぶならば、思心所及び、その思心所に相応して生起する所の、心、心所、及び心生色法などは、皆、善・悪業の熟するのを支える機能を、持っていると言える。

Vipākā cattāyo arūpino khandhā aññamaññam

Vipākapaccyena paccayo hoti//

四つの名蘊（受、想、行、識）の果報縁、果報因及び果報縁は、相互に縁となる。

（注 5）俱生業縁（sahajatakam）、その縁法は、89 種類の心所の中の、思心所である。縁生法は、思心所に相応する、心と心所、及び俱生色法である。俱生業縁となる思は、それに相応する所の名法をして、各自各々の作用を執行せしめ、同時に、ある種の色法を励起せしめる。《アビダンマ概要精解》参照。

異利那業縁（注 7）（nānākkhanikakam）

次に、読者の皆様が比較的理解しやすい「異利那業縁」と、比較的理解しにくい「俱生業縁」について、説明する。異利那業縁とは、今現在造（ナ）した善業が、いまだ報いを受ける事がない、すなわち、今現在造（ナ）した善業は、即刻報いを受ける事はなく、未来においてようやく果報を得る事を言う。悪業もまた同様で、悪業は、即刻報いを受ける事はなく、将来においてようやく果報を受け取る。これが、皆さまが理解している所の善業と悪業である。業を造（ナ）した事と、果報を受け取る間の時間は一体どれほどになるか、という問題は、後の頁において説明する。

（注 7）異利那業縁（nānākkhanikakam）、その縁法と縁生法の間には、一定程度の時間を有する。

この縁の縁法は、過去の善または不善思である；縁生法は、結生及び生命期の内の果報心及びその心所、及び業生色である。ここにおいて、縁力は、思によって生じる所の、相い符合する所の、果報名法及び業生色の能力である。この縁は、また、道心と果心の間にも存在する。《アビダンマ概要精解》参照。

業は種子の如く

古徳と論師たちは、「業」を「種子」に例える事が多い。大樹はなぜ大きくなるのか？ それは種子があるが故に；若し種子がないのであれば、木は育つ事ができない。大樹が成長するのは、色々な種類がある、その種の内の一つである事、それが主な因である。業もまた同じように、善または悪を為している時、思心所は、非常に強くて力があるものである。ごらん！ 私が一回また一回と、法話をしている、その時の言葉の中には、思の力が充満している。（+他人のと）同じ声であったとしても、この（+私の）声には、思の力が充満している。なぜであるか？ というのも、私は聴衆のみなさんに（+仏法を）理解してもらいたいという、非常に強い心意があるからであり、この（+強い）心が、すなわち、思なのである。

思心所は、どのような善業、または悪業の心所の中にも、含まれている。例えば：今日の齋主と、食事を供養しない人との間には、それぞれ心の状態は異なる。齋主の心には、強くて力のある思があり、彼女は僧衆に齋食を提供しようと、一心に考え、その為に、彼女の思心所の力は、絶え間なく増大し、故に、早朝から齋食の準備をしている。彼女の心は、齋食を準備しない他の人々の心とは、まったく異なるものなのである。

もう一つ例を挙げる。寺院を建築する時、その担当者は早く建てたい、美しいものを建てたい、道場を荘厳あるものにしたい、と思う。この時、彼の思は、他の人とは非常に異なる状態になる。その差は、彼の心意が相当に強烈である、という事である。思は、一種の強くて力のある意志力であり、善をなす時、その全体の過程の中においては、その他の善心と善心所の存在もあり得るとしても、これらの心と心所の内においては、思の力が一番強く、その他の心と心所に比べても、その強さは二倍以上になる。故に我々は、「思はすなわち業である」と定義するものである。

礼賛

**Kammapaccayo atthi iti bodhentam vandāmi**

無上の智遍（+知）によって、一切の業縁の存在を知る世尊に礼拝致します。

業は、樹木の種の如くに、強烈な意志の思であり、すなわちそれは、「異刹那業縁」と「俱生業縁」の中に介在して存在しており、衆生はなく、補特伽羅はなく、非我・非他であり、純粹に法性に属する。

偉大なる仏陀！ あなたは、無上なる智慧でもって、法性は無我である事を遍知して、その後、多くの衆生に知らしめた。私は、あなたの徳を憶念し、あなたの風貌を観想し、称え、讃嘆し、心より合掌し、あなたに礼拝致します。

善哉！善哉！善哉！

業果報の観察

業について語るならば、必ずや、業の果報についても語らねばならない。果報とは安定しているもので、不善果報は安定しているもので、善の果報も安定しているもので、道と果の果報もまた、安定しているものである。熟睡している時の心は、何もしていない、などと思ってはならない。熟睡時の果報心は、依然として、不断に生・滅しており、この時の果報心と、入胎した時の結生果報心は、同じものである。もし、菩薩たちの入胎、入胎時の心が、智相応であるならば、すなわち、無貪因、無瞋因、無痴因の、高尚な結生果報心であるならば、菩薩たちの睡眠時には、同様の果報心が生起する。たとえば、ある子供がいて、その子供の、入胎の時の、彼の心が、非常に活発であるならば、熟睡している時の心は、この心になる。



この果報心は、不安定であるか？

否、非常に安定している。結生の時、若し、心の状態が、非常に、喜びに溢れたものであれば、熟睡している時、この心を支える事を喜ぶ・・・その為、顔に、和やかさと喜びが、浮かぶ。私はよく人を観察するが、ある種の人々は、結生の時、特に嬉しいとも、嬉しくないとも思わない、すなわち、捨の状態であるが故に、熟睡している時も、和顔・喜びの色が浮かぶ事はないし、また、瞋恚の表情もなく、ただ、普通の表情であるに過ぎない。このように、我々は、色々な方法を用いて、人々を観察することができる。

我々は、この殊勝な方法を用いて、自分の子供を観察することができる。一人の子供が、もし、歓喜の心、智慧と相応した無痴心で入胎したならば、この子供は非常に賢く、容姿もまた非常に秀麗で、活発である；もう一種類の子供は、顔貌は特殊ではなく、非常に普通で、智慧もない場合、我々は、この子供が、どのような心識で入胎したのか、想像する事ができる。

これら熟睡時の心、入胎の時の心、及び日常生活における、目標を持たない所の、非常に多くの心識流は、皆、果報心に属するが、それは過去に造（ナ）した業の果報心なのである。もし、熟睡の時に、ひとつも夢をみないのであれば、これは果報心であり、非常に安定しているものである。果報心の特徴は、すなわち、安定である。ちょうど大樹の下で涼む人間に、サワサワと涼しい風が吹いて、非常なる清涼を感じて、満足するが如くである。果報心は、不活発であり、活動的なエネルギーを保有していない。

果報心は、安定的な状態にある時、その他の心、心所もまた安定する。果報心は、その他の心と心所に伝える：「私の安定度に合わせて、あなた方もまた安定していなさい。」心と心所もまた、応答する：「はい、我々もまた、あなたと同じ様に、安定します。」この種の安定、清涼の気分は、お互いに感染し合うが、しかし、これは涅槃の清涼を、言うのではない。不善果報もまた同様である。畜生道にある衆生の、その熟睡時の果報、たとえば、子猫が熟睡している時、それは、不善果報ではあるものの、しかし非常に安定している。これらは皆、果報縁である（注8）。

（注8）果報縁：この縁の縁法は、それと同時に生じる所の縁生法をして、受動的で不活発であるように保持する。この縁の縁法は、果報心と心所である；縁生法もまた、当該の果報名法と、俱生色法である。諸々の果報心が、業が熟する事によって生じる為、それらは不活発であり、受動的である。このように、熟睡者の心には、果報有分心が連続して不断に生・滅しているが、それは、身・口・意の業を造（ナ）すには至らないし、また、はっきりと目標を知覚する事もない。同様に、五門心路過程の中の果報心は、そ

これらの目標を、認識する力はない。ただ、速行の段階においてのみ、(+心は) 目標を、しっかりと認識する。という事は、速行の段階において初めて、業を造(ナ)す事ができるのである。《アビダンマ概要精解》。

礼賛

Vipākapaccayo atthi iti bodhentam vandāmi

果報縁：

清涼で、安定していて、無熱で、無悩で、諸法を安定させる事の出来る、果報縁。その中に衆生はなく、補特伽羅は無く、非我・非他であり、純粹に法性に属する。無上の智でもって、斯くの如く遍知し、かつ、一切の衆生にそれを告示した仏陀・・・私はあなたの徳を憶念し、あなたの容貌を観想し、讃嘆し、敬意をもって合掌し、あなたに礼拝致します。

善哉！善哉！善哉！

最初の速行心の力

人々は、業と業果の関係を理解しないが故に、常に、己の本意とは合致しないながら、種々の善業または不善業を為す。その為、上記の道理を理解する事は、非常に重要である。迦葉仏は、托鉢に行く前に、必ず入定する。この種の定は非常に安定していて、これを、滅尽定と言う。仏陀の心は本来、非常に清浄で、安定している。しかしなぜ、托鉢の前に、仏は、滅尽定に入定するのであろうか？

それは、供養する者に、更に大きな利益を得さしめる為である。というのも、入定した後、心は更に清浄になり、更に安定・安止する。それ故に、供養する者は、更に大きな功德の利益を得ることができる。反対に、供養の対象が、心猿意馬の、心思が暗く、心が不清浄な人であったならば、布施者は、功德の利益を得る事が難しいのである。

現生受業(=今の生で業を受ける事)の状況、それはちょうど、シャーリプトラとマハーカッサパ尊者の(+実践した様子が知られる)ように、彼らは托鉢の前に、先に滅尽定に入り、出定した後、本日、機縁の熟する衆生は誰か、と観察してから、その人の所に行って化縁(=縁を結ぶ)したものである。布施者の現生受業が大いに利益のある事、大果報がある事を願って、供養を受ける者は、先に修行・努力をしておかねばならない。阿羅漢のように、すでになんらの煩惱もないという状況の下、彼らは布施する者が、更なる利益を得られるように、供養を受ける前に、まず、入定する。

私は、これらの事柄に深い理解があるが、しかし、私は、会う人々全員に、布施をする事はできない。私は、布施する対象を目の前にしても、(+よき結果を)求める事無

く、布施をする。ただ与える為だけに、与えるのである。もし、私に（+よい結果を）得たいという気持ちがあるならば、清浄なる僧衆に布施して初めて、更に多くの利益を、得ることができる（+事を私は知っている）。

七個の速行心の中の、最初の速行心は、その力が弱い為、その果報は、唯一、現生受業しか生じ得ない。最初の速行心は、なぜこのように弱いのであるか？　たとえば、檀香で衣服を燻す時、合計七日燻す必要がある。一日目、衣服に少しばかりの、檀の香がする。二日目、三日目、七日目、衣服はだんだんに香ようになる。一番目の速行心の力は、一日目に薫じた衣服のように、香が非常に淡く、力は非常に弱い。七番目の速行心の力は、七日間燻した衣服のように、最後に最も香り、最も力がある（+のと同じである）。

七番目の速行心に最大の力があるとして、それはいつ、現実の果報となって現れるのであろうか？　それは第二番目の生（=来世）において、である。第七番目の速行心の力は強く、我々をして結生せしめるのに十分であり、それは、我々をして、もう一つ別の、新しい生命を生じせしめるのである。

#### 一番目の速行心の果報の状態

一番目の速行心は、力が非常に弱い為、その果報は、現前の、この一生においてのみ、現起（現象）する。もし、果報が、この一生において現起（現象）しないのであれば、それは、無効業となる。無効業とは、何の果報も齎さない業の事である。しかし、一番目の速行心は、まったく果報の感得と無関係なものであろうか？　否である。善なる事をなしたならば、一番目の速行心は、その作用を発揮して、善果を感得する。たとえば、私は度々、仏法に関する著作をしたためるが、故に、私は、非常に深く三宝を尊重・尊敬している。なぜであるか？　というのも、このような思心所は、我々を保護してくれて、種々の罪障を取り除いてくれるからである。

これは、一番目の速行心が果報の作用を生じる所の、一つの例である。貧乏な摩訶度とカカウリヤは、阿羅漢に供養した後、現生（=現世）で、大富豪になった。これは、清浄なる阿羅漢が、入定した後に托鉢に行った事が原因である。阿羅漢の心は、比べるもののない程清浄であり、かつ安止して、また、供養の品も、如法に得たものであるが故に。このように、一番目の速行心が作用を生じ、布施した者に、現世において、大富豪になる果報を齎したのである。ただし、このような状況は、めったに発生しない。

もし、一番目の速行心の力が、その果報を現起（現象）させる程の力を有しないとき、それは、過去の造（+）した所の業と組んで、果報を現起（現象）させる。たとえば、

小川があつて、大雨が降ると、上流の水に雨水が加わり、勢いのある大きな流れに変化するようなものである。もし、小川の水だけであるならば、ただ静かに流れているだけであるが、雨水が加わる事によって、各種の姿態を持つ波が生起する、という訳である。過去の業は河の流れのようで、現在の業は雨水のようである。過去の業に、現在の業を重ねると、雨水が河に流れ込むように、一番目の速行心は、果報を生じる事ができるようになる。そうでない場合、現生の、非常に混乱した所の一番目の速行心の大多数は、果報を産まない無効業になるのである。

#### 七番目の速行心果報の状態

最も力の強い七番目の速行心によって生じる果報は、もう一つの一期の生命を生起させるに十分足りる（+力をもっていて、）・・・天人に生まれることも、人に生まれることもできる。一番目の速行心に、もし、果報が現起（現象）するとしても、現在の生において、多少とも、更に幸福になるだけであり、もう一つ別の、一期の生命を打ち立てることはできない・・・（+すなわち）結生心を、生起させる事はできないのである。七番目の速行心は、今の生を幸福にするだけでなく、もう一つの、一期の生命の現起（=現象が生起する事）を支える事ができる。以上は、善業の速行心に関する、説明である。

不善業の速行心もまた、同様である。一番目の速行心が、もし、大阿羅漢を誹謗するものであれば、それは即刻、果報を生じせしめる。たとえば、ある時、シャーリプトラが頭を剃ったばかりの時に、難達という名の夜叉が、シャーリプトラのツルツルの頭を何度か叩いた所、難達夜叉は、即刻死亡し、無間地獄に落ちたのである。彼を即刻死亡せしめたのは、一番目の速行心の作用であり、彼を無間地獄に落としたのは、第七番目の速行心の作用である。こうしたことから、善であつても、不善であつたも、第七番目の速行心は、最も力が強く、それはもう一つ別の、一期の生命を現起（現象）させることができる（+事が分かる）。

もし、第七番目の速行心が、「次の生」で果報を生じない場合、第七番目の速行心の業は、無効業となる。我々には多くの無効業があり、緬甸語で言うならば、＜惜しい業＞という事になる。衆生は、多くの業を造（+）すが、しかし、すべての業が、「次の生」において、同時に果報を生起せしめる事はない。多くの業の中において、第七番目の速行心の業のみが、結生の果報を、生じせしめる。もし、第七番目の速行心の業が無効業になる時、その時には、如何なる果報も生じない。



## 五個（２～６）の速行心の果報の状態

第二番目から第六番目の、真ん中の速行心の（＋その速度は）、急でもないし、ゆっくりでもない。この、中間の五個の速行心における、善または不善なる業は、いまだ涅槃を証していない所の、未来の世において、そのどれもが、果報を熟させる機会を有している。（＋それらは）絶対に、どこそこの世において熟す、という（＋決定的機能は）有しないが、しかし、因と縁が揃った、その世において、熟す事になる（＝熟して果報を齎す）。

我々は過去世において、重大な善・悪業を造（＋）してはいないであろうか？よく考えてみようではないか。もしあるのであるならば、それは、結生する事それ（＋自体）が、果報である。それ以降にまた果報が生じるならば、それは単独では生起することはなく、過去の五個の速行心と業が一緒になって、果報を生じせしめる。これが、善業を造（＋）す人には、非常に多くのよい果報が得られ；不善業を造（＋）す人には、善の果報を生起せしめるなんらの力もない事を、物語っているのである。

善には善報あり。

我々は、過去の無数の生（＝世）における業力を持っていて、一つ一つの生（＝世）において、一回指を鳴らすその一瞬の間に、無数億の五個（２～６）の速行心による業が生じている訳であって、これは相当に、観るべきものがあるのである。僧衆であつても、在家居士であつても、数えきれない程の、五個の速行心の業がある。しかし、その果報はどのようにして、生じるのであるか？ この五個の速行心の果報は、第三番目の世（＝生）から、未来において涅槃する前までの、すべての生命期の中において、成熟するチャンスを擁するのである。

時機が熟すると、果報は生じ、時機が熟さなければ、果報は現前に生じない。それは結生の果報になる事もあれば、結生から、その一期の生命の終焉までの、なんらかの果報であることもあり得る。たとえば、仏陀と阿羅漢たちは、清涼なる涅槃を得た後、彼らは、依然として非常に多くの、五個の速行心による業を残したが、しかし、これらの業は、無効業なのである。我々は今、三種類の果報の状況を理解した：

一番目は「現生受業」で、それは一番目の速行心によって、生じる果報である。

二番目は「次生受業」で、それは第七番目の速行心によって、生じる果報である。

三番目は「後々受業」で、それは中間の五個の速行心によって、生じる果報である。

すべての有情は、非常に多くの、「後々受業」を擁しており、業を造（＋）した三番目の生（＝世）から始まって、未来において涅槃を証悟する前まで（＋の生において）、因と縁が熟しさえすれば、それは即刻、果報を生じせしめるのである。

### 重業 (garukakam ママ)

重業とは、非常に大きな業の事である。善業の場合で言えば、たとえば、禪定を得た所の・・・今生において禪定を得た人の、その次の生は、絶対に善なるものであり、それは、梵天に生まれ変わる事のできる業であり、これは非常に重大な善業である、と言える。不善業の場合は、父母を殺す等の五逆の罪を言う。

この種の重業の果報は、必ず生起するもので、果報は彼をして、無間地獄へと落とすし、また、それを阻止できるいかなる業も、存在しない。提婆達多は、この例である。というのも、彼は、仏の身体から血を流さしめ、故に、無間地獄に落ちたのである。どのような善業をもってしても、彼が地獄へ落ちる事を、止める事はできなかった。(＋善業は)ただ、地獄で受ける苦しみを、一時的に、軽くする事が出来るだけである。

善業と悪業、双方ともに、果報を齎す。重業の、思心所の第七番目の速行心は、その場で止まるという事は不可能であり、必ずや、当該の果報が、次の生で熟すのを促すのである。そうであるから、我々はしっかりと考えなければならない：

我々には、善の方面における重業があるであろうか？ 今の所は、ない；

悪業の方面における恐怖の重業は、あるであろうか？ ない。

そうであるならば、我々は、我々の未来の生において、重大な善業の果報も、悪業の果報もないのだと言える。

### 臨死業 (=臨終業) (āsannakam ママ)

臨死業は、臨終の時に造(ナ)される業である。たとえば、二人の敵がいて、双方共に瞋恚の心を持って戦い、武器でもって、相手を打ち倒したならば、この行為を臨死業と言う。もし、他に重業がなければ、次の生の果報は、必ずや、この臨死業の果報となる。またたとえば、法友が、病人に経を回向したいと思い、法師を呼ぶなどし、または、病人に仏法を説いて聞かせる等したなら、これもまた臨死業である。

ある一つの物語を例にとる。ある時、仏陀が説法をしていると、一匹の小さなカエルが、仏陀の説法の法音を聞いていた。もちろんカエルには、内容を理解する事は出来なかったが、心が爽やかになったので、そこに留まってしっかりと聞いていた。これは善業に属する心である。この時、牧童がいて、自分の杖を地面に突き刺したが、不注意から、小さなカエルを、生きたまま突き殺してしまった。このカエルの臨死業は、聞法の善業である為、カエルは、天界に生まれて、天人になったのである。

### 慣行業 (āciṇṇakam ママ)

ある種の業は、臨死業ではなく、普段において薫習されたものである。不善業で言えば、ある種の人々は、普段、不善なる行為を実行する。それはたとえば：喧嘩、殺人、

偷盗、放火などであるが、（+彼らは）これらの行為から、何らかの利益を、得られるのだと思っている。常々このような業を造（+）す人は、臨終の時に、もし、他に更に重い業がなければ、彼らが常々薫習している所の慣行業が、優先的に果報を生じせしめるのである。善業もまた、同様である。

常々、仏陀をもって所縁の境とし、仏を拝し、斎食の供養、花の供養などを薫習するならば・・・、日常生活の内に、如法で如律な、正当な職業に従事して生命を維持し、一切の行為において、善業を保つ時、これを慣行業と言う。もし、臨死業があるならば、優先権は、臨死業によって占められるが、もしないならば、慣行業が果報を生じせしめる。こうしたことから、みなさまは、生活する上で、己自身の身・口・意の三業を守り、戒清浄を持さなければならない。（+私が）このような話をするのは、みなさまが臨終の時に、恐怖や懼れから遠く離れる事によって、安心して善趣に、往生して頂きたいからである。

どうかみなさまは、私の気持ちを理解して、ご自身で出来る限りの力を尽くして、実践して頂きたいと思う。我々、ここにいる一群の人々は、過去において、重大な不善業・・・父親殺し、母親殺し、阿羅漢殺しなどの五逆の罪を造（+）したことはないと思われる。故に、我々が留意しなければならないのは；臨終に近い臨死業は、果報を生じせしめる、という事実である。もし、臨死業がないのであれば、普段、薫習している所の慣行業が、果報を生じせしめる。故に、一人の良き人間として生きる為には、普段から、多くの善業を育成しておかねばならないのである。

#### 已作業（katattākam ママ）

その他の業の果報が、現に生じていない時、已作業はようやく、果報を生じせしめる。上述の三種類の業があるとしたならば、この三種類が優先される。已作業は、業を造（+）すその時には、非常に強い願望というものはなく、それはただ、まったく普通の動作であり、行為であったりする。それは、多くの生において行ってきた、通常の所作であり、行為であり、非常に重い行為ではない。重業、臨死業または慣行業がない、という状況の下、已作業はようやく、その果報の作用を、発揮する。

（+あなたは）造（+）した善業は、みな、果報を生じると、考えてはならない。一つの果報の成熟には、非常に多くの因と縁の条件が、整わなければならないが故に。この点に関して、一つの物語を、語って聞かせたいと思う。それは、一人の国王の邪見についてである。この国王には一人娘がいた。この一人娘は、アーナンダの過去生である。物語の一部分は、已作業と関係がある為、私は、この物語を已作業、また他の関連する所の業と結び付けて、次の機会に、お話ししたいと思う。

## マハーナーラタ伝

一人の、名を英加帝という、よい国王がいた。国王には一人娘がいたが、名をルチャーと言った。ルチャーは、非常に美しい王女で、アーナンダの過去生であった。国王は王女を可愛がり、よく花籠を、ルチャー姫に贈った。ルチャー姫の随従たちが、その花を花飾りにして、ルチャー姫の身に飾った。国王はまた、よく美しい絹を王女に贈り、彼女に毎日、異なる服装をするように要求した。ルチャー王女と国王の関係は、非常によいものであった。国王は、国家を統治することに長けていて、故に人民は安居し、仕事に励み、国家は安泰であった。

ある年の10月15日、国王と群臣は、新月の美しい夜に、何が人生の楽しみかという議題について、議論をしていた。その中の一人が、智慧のある修行者を訪ねて、その修行者に、我々の疑問を解いてもらおうではないか、と提案した。皆が同意したので、国王は、群臣を連れて、当時、有名であったウクナ裸体外道に、会いに行った。裸体外道が服を着ないのは、己はすでに、何等の煩惱もない修行者であるが故に、心は非常に清浄であり、服を着なくてもよいのだという風に言った。また、あれら服を必要としている人々は、心が不清浄であるが故に、衣類を必要としているのだ、と主張した。

国王と群臣が、ウクナの所に来たとき、そこにはすでに、多くの求法の信者たちがいた。国王の番が来た時、国王は恭しくウクナに挨拶をし、以下の問題を問うた：

- 一、子女は、どのように、父母に対応するべきか？どのようにすれば、よき子女と言えるか？
- 二、弟子（師弟）は、師長に対して、どのような態度で対応するのが、よい弟子であるか？
- 三、一家の主は、どのように妻、子に対応するべきか？彼らに対して、どのような態度で対応するのが、よい夫であり、よい父親であるか？
- 四、国王として、名君でありたいならば、どのように大臣に対応し、大臣を指導するべきか？
- 五、どのような法を修習すれば、衆生は、善趣に往生することができるか？
- 六、どのような不如法なる事をするか、人は地獄へ落ちるのか？

国王が訊ねたのは、どれも非常によい質問であった。しかし、この質問は、ウクナにとっては、非常に難しい問題であった・・・というのも、彼はこの種の問題を考えた事がなかったし、この方面の知識もなかったからである。ウクナは、何を聞かれても、答えることができなかったが、しかし、彼のような、非常に有名な人間は、「私は知らない」などと言えるはずがなく、彼は仕方なく、定命論（=宿命論）でもって答えた。



ウクナ外道の法

Natthi dhammacaritassa phalaṃ kaly āna pā pakam

Natthi deva paro loko ko tato hi idh āgato (ママ)

「大王、学ぶべき、善法とか悪法とかは、ありません。前生の業が、今生に影響するなどという事も、ありません。すべての有情は、無因によって、生起するのです」

Natthi deva pitaro vā kuto mātā kuto pitā

Natthi ācariyo nāma adantaṃ ko damessati

「いわゆる祖父、祖母等の先輩というものはなく、父母もない。故に、学ぶべき孝行の仕方、というものもない。人を導く事のできる教師というものはなく、賢くて、礼儀正しく、他人に教わる必要のない人間は、その人自身が自ずと、できるのです：賢くない人、礼儀のない人は、どのように教えても、心血の無駄であり、効力のないものなのです。というのも、一人の人間を変える方法など、ないのであるから。礼儀の正しい人は、元から正しいのであり、他人から教えを受けて、そうなる訳ではないのです。世の中に、他人に教えられて、賢くなったり、礼儀正しくなったりするような人間は、いないのです。」

Samatuly āni bhūtāni ntthi je ṭh āpac āyikā Natthi balam vīriyaṃ vā kuto uṭh ānaporisaṃ (全体ママ)

「すべての地・水・火・風等の四大は、みな平等である。信徒たちの地・水・火・風と、大師の地・水・火・風はみな同じであり、何も特別な事はなく、誰かが誰かより優れているという事はない。故に、先輩を尊敬する必要もない。それには、何等の利益もないが故に。」

Niyatāni hi bhūtāni yathā go ṭaviso tathā Laddheyaṃ labbhate macco tattha dānaphalaṃ kuto

「四大は常法であり、それは一定の定律を持つ。この定律は、非常に自然なかたちで、衆生を人間にならせたり、天にならせたり、畜生にならせたりする。誰も輪廻の命運を変えることは、できない。衆生の命運は、大きな船に縄で縛りつけた小舟のようだ。大きな船が行くところ、小舟もまた続いて行かねばならない；大きな船が前進すれば、小舟も前進する；大きな船が止まれば、小舟も止まる。小舟に、主体性はない。この種の大自然の定律を、人は変える事は出来ないのである。」



Natthi dānaphalaṃ devo avaso devo vīriyo Bālehi dānaṃ pauuattam  
paṇḍitehi paṭicchitam

「いわゆる布施の功德利益、及び果報というものは、ない。いかなる精進も、利益を得る事は、ない。布施は、なんらかの功德を得る事ができるという言い方は、孤独で寡聞の人間が、いう事である。これらの狡猾な人間は、供養を得たいが為に、このように衆生を、教化するのであり、実際は、何らの利益も、果報もないのです。」

Sattime sassat ā kāy ā acchejjā avikopino Tejo pathavī ā po ca  
vāyo sukhaṃ dukhaṃ jīve (全体マ)

「地・水・火・風、楽、苦、生命等の、七つの大きな元素は、誰もそれを変える事はできないのです。それは、恒常な自然法則であり、誰もそれを破壊することはできない。たとえば：一人の人間を殺すとして、それは、実際は、ナイフが地・水・火・風、楽、苦、生命等の、七つの大きな元素を通過しただけであり、殺人が起きたわけではないのです。人々が無知であるため、それは殺人と呼ばれますが、実際は誰かが誰かを殺す事はできないのです。というのも、死は自然なる常法であり、故にその人が死んでも、殺されたが為に死ぬ、という事はないが故に。これは自然の法則なのです。」

Sullāsīti mahākappe sabbe sujjhanti saṃsaram Anāgate tamhi kāle  
saññatopi na sujjhati

「人々は、八万四千大劫を経ない内は、どのように精進したとしても、何等の役にも立たない。精進、修行をしたからと言って、解脱に到達することはない。一切の修行は、空 (=空っぽ、無駄) であり、役に立たないものである。」

Caritv āpi bahuṃ bhadraṃ nevo sujjhanti nāgate Pāpañcepi bahuṃ  
katv ātaṃ khaṇam nātivattare (全体マ)

「善き人が、どのように努力し、修行しても、八万四千大劫を経なければ、解脱に到達する事はできない；悪人が幾ら悪くても、同じく (+解脱できる時期は)、八万四千大劫を、越える事はない。ただ八万四千大劫を過ぎさえすれば、愚者であろうが、智者であろうが、その時がくれば、自然に解脱することができる。」

Anupubbena no suddhi kappānaṃ sullasītiyā

Niyatim nativattāma velantamiva sāgaro

「ちょうど海水が、海岸を越える事ができないように、すべての衆生は、八万四千大劫の定命 (=宿命) の境界線を越えることは、できない。八万四千大劫を経過すれば、定命は、愚者であっても、智者であっても、自然に解脱することができる。」

## アラータ (Alāta) 将軍の物語

国王は、ウクナの説法に対して、心を集中して、熱心に考えた。この時、国王と一緒に随行して来たアラータ将軍が、(+ウクナの説法を) ここまで聞くと、以下のように言った：

「大師のおっしゃる通りです。大自然の定律は、変えることのできないものです。それは正しい。衆生の生命は、自然の定律に沿って展開するのであって、善業または悪業の影響を受けない。私は、私の前世を覚えているが(宿命智の事、ただし、彼はただ一生だけ見る事ができた)、名をビンカラと言ひ、牛を殺すのが仕事であった。あの時、私は牛を殺すだけでなく、他にも多くの動物を殺した。私は死後、将軍府に生まれ、今、将軍職についている。私が前世において牛を殺した業は、果報を齎さない。もし、ある種の人々が言うように、因果業報というものがあるならば、牛を殺すのを職業にしていた男が、なぜ、将軍になるという果報を得る事ができたのか？ なぜ、地獄に落ちて苦しみを、受けなかったのか？ みなさん、私は地獄になぞ落ちていない！ その上、私の家族は皆、将軍になっている。」

将軍のこれらの言葉は、因果業報を否定していることになる。先に、彼がなぜ将軍になり得たのか、という事を解説する。それは、彼の多くの生の、その以前、迦葉仏の時代、彼は阿那洒花の花飾りでもって、仏塔を供養したことがあった。その時仏塔を供養した善業(已作業)は、即刻果報を生じせしめることはなかった。それはちょうど、灰に埋められた燃える炭のようであった。彼が前世に輪廻した時、すなわち、牛を殺すのが職業であった時、殺業を造(+)したけれども、彼が臨終の時に、仏塔を供養した善業の因と縁が熟して、果報を生じせしめた。仏塔を供養したという善因の故に、彼は、高貴な将軍の種族に生まれたのである。

過去生の善業は覆いかぶされ、牛殺しの一世において、因と縁がようやく熟した。その後、牛殺しの不善業は、また覆いかぶされたが、未来において、この不善業の果報は、必ずや熟すであろう。このアラータは、デイバダッタの過去生であり、前世の牛殺しの男が、今生では、将軍になったのである。国王は、業果の原則を理解しないが為に、裸体外道ウクナの論点を、更に強固に肯定してしまったのである。



## ビージャカ (Bi-jaka) 奴隷の物語

この時、国王の随従の中に、ビージャカという奴隷がいて、彼が泣き始めた。

国王は訊ねた：「なぜ泣くのか？」ビージャカは言う：

「私も、私の前世は奴隷ではなく、一人の富豪で、多くの善業を為した事を覚えています。人が化縁に来る（＝縁を繋ぐことを求めて来る）と、私は喜んでお布施をしました。皆は私の人となりを讃嘆したものです。私は、人として善良であるばかりでなく、布施を好み、また、これまで良心に反する行為をした事はありませんでした。しかし、その生で、私は死亡するや否や、結生識は、なぜか奴婢の腹中に入胎し、私は奴婢の息子になってしまいました。私は奴隷ですが、布施を好む気持ちは、身分と関係なく、減少する事はありません。ある時には、食事中に食べ物を乞いに来た人がいれば、私は碗の中の食べ物を布施します。すべての齋戒の日には持戒します。私は、前世で非常に多くの善い事、布施、持戒をしましたが、よい果報は得られませんでした。アラータ將軍の説は、正しいと思います。布施、持戒などの福の修習は、なんら善の果報を齎す事はありません。」

アラータとビージャカの二つの物語は真実である為、その場にいた人々は、強く信じてしまった。国王は、ウクナの説明した法について、深く考えて、100%ウクナの無因論を信じた。次に、なぜビージャカは、富豪から転生して、奴隷になったのかを、説明する。迦葉仏の時代、ある日、ビージャカの牛が、失踪した。彼は焦って、森の中を探し回った。この時、一人の比丘が、森の中で、道に迷っていた。ちょうど、牛を探しに来たビージャカに出会ったので、比丘は彼に訊ねた：

「居士！どこそこへ向かう道は、どれですか？」

ビージャカは牛が見つからないので、気もそぞろであった為、比丘を無視して、答えなかった。比丘はもう一度訊ねた。この時、ビージャカは腹を立てて、苛立ちながら答えた：

「あなた方法師というのは、なんてうるさいのだ！奴隷だけが、こんなふううるさい。あなたも元は、奴隷だったのでしょ！」

牛が見つからない為に、ビージャカは苛立ち、不善なる口業を造（ナ）した。その生においては、この業は覆いかぶされたが、それはちょうど炭に灰が被ったために、一時的に燃え上がらないようなものであった。

次の、富豪になったその世において、彼の臨終の時；迦葉仏の時代の一世において、「牛が見つからないので苛立って、比丘に無礼な言葉を投げつけた業」の果報が熟し、それが優先権を得たが為に、この一生は、奴隷の身分になってしまったのである。富豪の時の一世の善業の果報は、未来の世において熟すであろう。このビージャカという奴隷は他の誰でもなく、モッガラーナ尊者の本生物語である。

国王はウクナの定命論 (=宿命論) を聞いた後、またアラータ将軍が、牛殺しから将軍に転生した話、ビージャカ奴隷の前世の話、すなわち、多くの布施、持戒などの善業をしても、富豪から奴隷に転生した話を、聞いた。その後、国王はウクナの定命論に賛成し、ウクナに言った：

「一切の命運は、すでに決まっている。それならば、私がここに来て、あなたの法を聞くのは、私が命を楽しむ時間の、浪費になるではありませんか？ 私はこれにてお暇します。いつかまたお会いしましょう。」

国王は、ウクナに礼拝もせず、そこを去った。というのも、定命論においては、人々は平等であり、誰かが誰かを尊重する必要はないからである。

次の日の朝、国王は大臣たちを集めて会議を開き、次のような事を決定した・・・すなわち、朝政の事は、アラータ将軍が処理し、その他の事柄は、大臣たちが分担する事、そして大臣たちに宣言した：

「これから以降、大小のすべての事柄は、みな大臣たちが処理すればよい。私の邪魔をしないでくれ。私は唯一、楽しみだけを、享受したい。国中の天香の美女、若い女性は、皆私の所へ来るように！」

全国の民衆は紛々と議論して言った：

「国王は、ウクナ外道の邪見を聞いて、愚君になった。宮殿の中で酒を飲んで女性と戯れ、人々の生活に関心をよせない。そして誰も、彼を諫める事ができない！」

国王の娘ルサーは、父王が言う邪見を聞いた後、以下のように思った：

「もし私が、いますぐ父王に会いに行ったら、それは非常に失礼に事でしょう。私はやはり、これまで通り、斎戒日の前の日に、父王に会いに行きましょう。」

ルサーは、二週に一度、父王に会いに行き、その時父王は、彼女が布施・供養が出来るように、毎回、一千元のお金を渡していた。父王は、ルサーにこのお金を渡す時、ルサーがたくさん布施をして、福を修するように、と希望した。

ルサーは、斎戒日の前の日まで待って、随従たちに言った：

「明日は斎戒日です。皆さん、着物を整えて、父王に会いに行きましょう。そして、明日供養する為に必要なお金を、頂きましょう。」

国王は己の娘が、多くの随従を従えてやって来るのを見て、非常に喜んだ。

国王は嬉しそうに訊ねた：

「最近、元気になっているか？後宮にいて楽しいか？花園や湖の方へは遊びに行ったか？」

ルサーにとって、これらの事は重要ではなかったので、ルサーは丁寧に行った：

「父王の福に依りて、娘は、一切安楽に過ごしています。明日は齋戒日です。供養のために、父王に一千元を頂きに参りました。父王様、許可をお願いします。」

国王は、今回は、お金を出さないだけでなく、ルサーに教訓を垂れた：

Baḥuṃ vinasitaṃ vittaṃ niraṭṭhaṃ aphalaṃ tay ā Upostathe vasam  
niccaṃ annap ānaṃ na bhuñjasi

Niyatesaṃ abhuttappaṃ natthi puññaṃ abhuñhato (原文ママ)

「娘よ！ もう二度とそれら意義のない事をしてはいけない。あれらの行為は、お金の浪費に過ぎない。また、いわゆる齋戒日、物を食べない、食事をしない、それは単なる習慣的信仰に過ぎない。実際これらの布施、持戒などは、何等の利益も齎さないものである。あなたは生きている間、何等の布施も、持戒もしてはならない。その事を忘れないように。」

国王は続けて言った：

「いわゆる来世などない。一切は無意味であり、これからはこのような事に気を使う必要はない。私が述べるこれらの事柄は、皆、根拠がある。アラータ將軍、彼の前世は屠殺者であったが、今の一世は、將軍になっているではないか；ビージャカ奴隷の前世は、善行を好み、布施を好み、持戒が莊嚴なよき人であったが、この一世では奴隷になった。この事から、すべての事柄は、すでに定まったものであり、何をなしても、命運を変える事はできない事が分かる。故に、あなたは、お金を無駄にしてはいけないし、体力も無駄にしてはいけない。」

実際は、ルサーは、父王にお金を貰いに来たのは、父王に彼の邪見を披露してもらい、彼を諫めようとしたのである。

ルサーの願い

ルサーは感嘆しながら言った：

「父王！ 随分前の事です、私は『朱に交われれば赤くなる』という言葉聞いた事があります。今、それが証明されました。アラータ將軍とビージャカは愚かな人間で、智慧などないのです。愚かな人間が邪見者に親しむと、更に愚かになります。というのも、彼らはどのような因果応報も理解する事ができないからです。」

Tvaṃ ca dev āsi sappañño dhīyo atthassa kovido  
kathaṃ b ālebhi sadisaṃ hīnadithiṃ up āgami (原文ママ)

しかし、父王、あなたは一国の君であり、また英明な王です。何事にも深く思慮する事のできる国王が、なぜ、あの二人の愚かな話を信じたり、ウクナの邪見を信じたりするのでしょうか？父王、どうか三省して下さい。」

ルサーはまた言う：

「ウクナの定命論（＝宿命論）では、『何人も、ただ八万四千大劫の輪廻を過ぎれば、自然に解脱を獲得することができる。どのような修行を通して、生命を浄化する事はできない』というではありませんか。生命の輪廻が自然に浄化されるものであるならば、なぜ、彼は、あの恥知らずの、裸体苦行を修習しているのでしょうか？

父王！ あなたは、彼の論点の矛盾に、気が付かないのでしょうか？」

ルサーは、父王に邪見を改めてもらいたい為に、注意深く、己自身の過去世について話始めた：

「父王！ 私には宿命智があります。私はかつて、静かな場所で深く思慮した事があります。私が見たのは、ただ一生ではなくて、過去世の七世と未来世の七世でした。私が覚えている過去の一歩目の生から説明しますと、私は、一人の金細工の職人でした。私は美貌で、親戚や友人は、私と手を組みたがり、その後、私は悪い友達と付き合いしました。その為・・・」

#### Pugagaalapi upanissayapaccayena paccayo hoti

ここまで述べると、ご在席のみなさんはお分かりかと思うが、国王は、ウクナの邪見に深く影響されていて、ウクナの邪見は、現在の国王の強くて力のある主要な依存（＋の基）となっているのである。この邪見は、強くかつ力を有していて、彼を支えている。悪友に接近した事が原因で、親依止縁が彼を支えている、という訳である。アーナンダの過去生も同じであって、美貌の金職人もまた、悪い友人と交わったのである。一人の人間が、悪知識と親しむならば、その悪知識の邪見は、彼の強力な後ろ盾となり、主要な依存基となる。

この事を、全くたいした事のない事柄だ、と軽視してはならない。邪見は、深く人に影響を与える。悪人に親しむと、悪人が我々の親依止の力となり、我々の邪見を支える事になる。アーナンダの本生物語、すなわち、彼が金職人であった時の話であるが、彼が、非常に美貌であった為に、人々は一見すると好きになり、皆、彼をほめそやした。その後、悪友に親しみ、彼は傲慢になり、何をしても許されるという悪習に染まった。その結果、良家の婦女を侵犯して、邪淫戒を犯したのである。

金職人は、邪淫業を犯したけれども、この業は覆い隠されて、暫くの間、果報を生じる事はなかった。この一生が終わった後、次の生ではアーナンダは、裕福な仏教徒の家庭に生まれ、大いなる好人物になり、一生において、法相に相応する布施、持戒などを行った。次に我々は、彼の未来世を見てみる。彼の、金職人であった時代の邪淫業が熟し、第三番目の世においては、彼は地獄に落ちて苦を受けた。臨終の時の様子は、次の法話で話す。

彼は地獄にいて、長年の苦を受けて後、ようやく解脱した。地獄から解脱した後、一頭の羊になった。この羊は、非常に強壮であった為に、飼い主は言った：

「これは非常によい羊である。あれの男根を切り取ったならば、もっとよい羊になるであろう」

そういう事で、飼い主は、羊の男根を取り去った。この羊は非常に強壮であった為に、飼い主は、よくこの羊の背中に乗るのを好み、またよく荷車を引かせた。これがアーナンダの第四世である。

第五世、アーナンダは邪淫の業によって、雄の猿になった。その時、猿王は、この小さな猿の聡明な事、動作が素早い事を見て、思った：

「コイツは、大きくなったら、俺に敵になる。俺はいますぐ、アイツの男根をかみ切つてやろう。今後の安全のために」

これが良家の婦女を侵犯した、邪淫業の果報である。

第六世、アーナンダは度得大那（＝ドットクダイナ）という場所にいたが、一頭の牛であった。飼い主は、この牛を大きく育てたかったので、牛が小さい内に、男根を切った。故に、アーナンダは、非常に強壮で、走るのが速い、またおとなしく人を乗せる、荷車を引くよい牛になった。第七世、ようやく畜生道の苦から離脱した。この時、アーナンダは、男性でもない、女性でもない、陰陽人に生まれたのである。

#### ルサーの天道第六世

今回、アーナンダは苦の道から解脱して、天界で最も美しい天女になった。しかし、なんと、彼はいまだに、男身を得られないでいる！

最も美しい天女は、すなわち、帝釈天王の皇后という事になる。アーナンダは合計五世、天の皇后になった。第六世の天女であった時は、天子の妻になった。天道が終了すると、この一世はすなわち、英加帝王の娘——ルサーになったのである。

夫のある婦人と姦通した時の業によって、彼は牛、羊、猿などの畜生道に入る事になったし、また地獄へ行く事にもなったのである！ その後、布施と持戒に励んだ一世



の善業の果報が熟したので、天道に生まれる事ができた。しかし、夫のある婦人と姦通した罪業は、いまだ完全には解脱できていなかった。故に、彼は天道に生まれても、女性の身にすぎず、男性の身分を得ることは出来なかった。この一世では、国王の娘になったに過ぎないのである。

ルサーは己の多くの生における経歴を父王に伝えた後、父王に言った：

「父王！これらは皆、あなたの娘が宿命智でもって過去世を憶念したものであって、私がこれほどはっきりと憶念する事ができるのは、私自らの経歴であるためです。どうか父王は、これ以上ウクナの邪見を聞かないように、因果を誹謗しないようにして下さい。」

Īṅgh ānu cintesi sayampi deva kuto nidān ā te imā janindo  
Yā te imā, acchar āsannikās ā alaṅkat ā kañcanaḥ ālachannā (原文ママ)

次にまた、言った：

「父王！子細に考えてみて下さい。後宮のあの華麗な方たち、彼女たちの身分の高貴さ、毎日の衣・住と着る物の華麗さ、住まいの立派さ、すべて人より高級です。しかし、この事は、ウクナの言う定命論でしょうか？ 彼らは一生、このように幸福でいられるものでしょうか？ 父王！どうかよくお考え下さい！

これらの業の果報は、彼らが彼らの過去世における善業が熟した為であって、その事によって、初めて、このようにあるのです。」

国王は、ウクナの邪見を捨てる事無く、ルサーが必死に説いた、14 の生の、因果業報の関係を信じなかった。また国王は、王女のこれらの話を、このように思ったのである：「私の娘ルサーは、なんとおしゃべりが上手なんだろう！」

彼は、ルサーの物語を笑顔で聞きながら、これらの物語は、ルサーが、彼が、彼の知見を捨て去るようと、独り考え出した、架空の物語だと思ったのである。国王は、ウクナの邪見を放棄する気になれなかった。というのも、この定命論は、前世、未来世がなく、因果応報がないが為に、己の好きな事を好きなだけやれたからである。

ルサー王女の祈祷

ルサーは、自分が父王の邪見を捨てさせる事ができないのを知ったが、しかし、彼女は、諦める事はなかった。彼女は非常に敬虔に、合掌して祈祷した：

Etassa guṇe asati mama guṇena mama silena  
Mama saccena idha āgantv ā imaṃ micch ādassnaṃ  
Visajj āpetv ā sakalassalokassa sotthiṃ karontu (原文ママ)

「弟子は真心を込めてお願いします。世間の沙弥、婆羅門を護持しますので、皇宮に降臨して頂けますように；

弟子は真心を込めてお願いします。世間の、一切の衆神を護持しますので、皇宮に降臨して頂けますように。そして我が父王の為に、邪見を取り除いて下さいますように。もし、父王に、なんらの威徳がないのであれば、どうか私の威徳、戒行、誦行をもって、各方面の神聖が皇宮に降臨し、我が父王の為に邪見を取り除き、国民の幸福を謀って頂けますように。」

ルサーは、この願を発した後、また再び、敬虔に礼拝した。その時、我々の仏陀が、修行の為に、梵天に住していたが、それはナラタ梵天王であった。

#### ナラタ梵天王の説法

すべての菩薩は、みな時々刻々と正念を保持して、時々刻々、世間を観察し、世間を思惟している。彼らは、常に、世間において、善を修し福を作す人が、どの程度まで進歩したのか；悪い事をする人間は、どこまで悪いのかを、観察している。故に、王女が願を発した時、ナラタ梵天菩薩には、ルサー王女の敬虔なる要請が見えたし、また、英加帝王が邪見を手放さない様子も、見えた。故に、梵天王は思った：

「この王女は常人とは異なり、非常に優秀な王女である。私は本日、必ずや、行って様子をみてみなければならない。この国王の邪見は、すでに全国に影響を及ぼしており、全国の人民は言葉に言えない苦しみを味わっている。故に、私は、世間に様子を見に行ってみよう。世間の人々は沙門、仙人に対して非常に信頼を寄せているので、私は仙人に化けて行ってみよう。仙人に化けるといっても、老いて力のない仙人、六根の不足する仙人に化ける訳にはいかない。というのも、そのようであれば、人々は蔑視し、無視するであろうから。私は荘厳で端正な仙人になろう。」

こうして、彼は雅な、自分に似合う仙服を着て、右肩に、小さな披肩を掛けた；  
そうして、仙人の道具を持って、梵天から人間界にやって来た。彼は空中を歩いたが、その安定した動作と歩み、威儀の端正さは、梵天王の身に着けた威徳力であり、発散される光芒によって、人々は、空に月が顔を出したのだ、と思った。彼は Candaka 宮殿まで来ると、王宮の空の上に留まった。それは国王の上方であったが、人々はみな、仙人の吉祥なる様子に、見入っていた。最も喜んだのはルサーであった。彼女は仙人に礼拝しながら、思った：「私を助けてくれる聖賢が、おいでになった！」

国王は、梵天王が、吉祥なる様子で空に処しているのを見た——人の身に化けてはいるものの、梵天王の威徳力によって、国王は、龍座にいても落ち着かなかった——国王は、自ら龍座を降りて、地面に立って質問した：

「あなた様は、何用があつて来られましたか？ あなた様はなんという名ですか？

あなた様は何の種姓ですか？」

梵天王は、梵天の国がある事を信じない国王に言った：

「私は梵天から下ってきた者である。衆天たちは、私は積業種姓であると公認している。私はナラタ天王である。」

国王は、梵天の神通を学びたいと思ったので、質問した：

「ナラタ梵天王様、あなた様はどのような方法でここへ来られましたか？」

あなた様はどのような法を修習して、神通を得られましたか？」

あなた様のような境地は、どのような条件を具備しているものでしょうか？」

梵天は答えた：

「私は、真実語を不増不減に行持し、いかなる嘘、綺語（＝無駄口、おべんちゃら）も言わない；十善を行持し、六根を防護する；私は常々、布施などの福德を実践したが、そうすることによって自然に、神通は、私は身体の一部となるのである。私は随分前から、十善を修習しており、一時的に修習したわけではない。というのも、これらの善業の功德が、私をして、神通力を備えさせるからである。私の神通の功德は、私の心と同等であり、私は、行きたい所へ行くことができる。」

国王はまた訊ねた：

「ナラタ梵天王、私はあなた様に質問をしたい。正直に答えて欲しい。私に嘘をつかないで欲しいのだ。お訊ねします。本当に『来世』はあるのでしょうか？」

国王は邪見に固執しているが、それは、邪見の中には、来世はない、ためである。

梵天王は答える：

Atteva dev ā pitaro ca atthi, loko paro atthijano ya mahu,  
Kamesu giddhā ca nar ā pam ūlā , lokam param na vidū  
mohayuttā 。

「ありますとも！本当にあります。『来世』はあります。『父母』はあります。『先輩』など等も、あります。『五欲』にまみれた一部の人間は、『来世』を認めないし、『業報』も認めない。というのも、もし、彼らが『来世』を信じるならば、来世の恐ろしい『果報』にも、思いを致す必要があるが、しかし、それでは『五欲』を目いっぱい楽しむ事ができなくなるからである。これらの人々は、『無明』によって覆い隠されてしまっており、故に『来世』はない、などと言うのである。」



国王は、裸体外道ウクナの法に執着しており、故に彼は、「来世」はないという話を聞きたかった。彼は、ウクナの法を非常に好んだ。というのも、もし来世がないのであれば、彼は、己の欲のままに生きることができ、また彼は、すでに、他人の妻を侵犯していたが故に；彼は、この世に「梵天」が存在しているという事も聞きたくはなかったので、彼は、どこ吹く風のような、意に介さない態度を、取った。

英加帝王は、一国の国王であり、また、宮廷も彼のものであった。ナラタ梵天王は、仙人に化身していたが、しかし彼には、梵天王の威徳力があつたので、人間社会の存在である国王は、王座に坐る事を控えた。国王は、下方に立って、梵天王に質問を發したが、しかし、彼は尚、邪見を放棄することはなかつた。故に、また再び梵天王に訊ねた：「ナラタ梵天王、あなた様は、本当に『来世』があると信じますか？ 人は、今生で死んだならば、引き続き『来世』がありますか？ 来世とは、住むことのできる場所ですか？ あなた様が本当に『来世』を信じているのであれば、私に 500 円をお貸ください。『来世』に 1000 円にして、お返しいたしますので。」

ナラタ梵天王は答えた：

「もし、あなたが持戒莊嚴の人であり、かつ、あなたが良き人である事を私が知っていれば、私はあなたに、お金を貸すでしょう。というのも、私は、良き人の来世は、必ず善趣に生まれることを知っているからです。しかし、今のあなたは、悪事に満ち満ちています。あなたは必ずや、地獄に落ちるでしょう。一人の、地獄に落ちようとしている人間に、私はどうしてお金を貸す事ができるでしょうか？ もし私が、お金を貸したならば、私はどうやって、そのお金を取り返せると言うのでしょうか？」

世間の人々は、人にお金を貸すとき、ある程度相手に対して理解をしておかねばならない。少なくともこの人間が、怠惰でなく、努力家で、前途があるのだと、判断できなければならぬ。今、彼にお金を貸すと、将来、必ず利子と共に元本が返ってくる・・・このような人間であつて初めて、人々は、その人にお金を貸すのである。一人の、大食いであつた怠け者であり、また元手も持たない人間であれば、彼は借りたお金を使い果たし、お金を返すことなどないであろう。このような人間に、お金を貸す人は、いないのである。

「あなたは地獄に落ちる人間であるから、私はあなたに、お金を貸せない。」  
梵天王は、地獄とは、いかに辛くて苦しい場所であるかという、地獄の話を、始めた。「この種の、正に地獄の苦を受けている最中の人間に、私は、借金を返して貰いに行けるはずがない。行ったとしても、彼は借金を返せると思うか？ 故に私は、この種の人間にお金を貸す事はない。ある種の地獄は非常に寒くて、真っ暗で、手を伸ばしても自

分の指が見えない。寒くてお腹がすいて、そこは暗黒地獄と言う。この地獄の住人は、お互いを見ることができず、また一本の細い道路があるに過ぎない。一边は石壁で、一边は深い淵になっている。住人はその狭い道の上において、ただ只管石の壁に沿って歩くしかなく、食べ物はないので、いつも飢えている。故に、身体が何かにつつかると、それを食べ物だと思い込んで、それに飛びついてしまい、結果、深い淵に落ちて、身体は粉々になってしまう。もし、あなたがこのような地獄に住むとき、私はどのようにして、借金を回収すればよいのだろうか？」

国王が地獄へ落ちる可能性について、ナラタ梵天王が語り、そしてそれは、国王にまるで価値がないかのような話題であった為に、国王は、頭をうなだれた。国王は思った：「もし、私が本当に地獄に落ちたならば、非常に多くの苦を、受けねばならないではないか。」

次に、梵天王は、木綿地獄について話した。

「地獄には、棘を持った木綿樹があり、獄卒は、武器で以て罪人を打ち、罪人を無理やり、棘の生えた木綿樹に追い立てる。来世で、このような苦しみを受けるあなたに対して、私はどのようにして、お金を回収するのでしょうか？ 私はあなたにお金を貸す事はないのです。」

梵天王は、国王が地獄に落ちるであろう可能性を話した後、次に、持戒、行善の人たちがどのようにして、天界に行って生活を楽しむのかという話をした。人々は知っていた。

ルサー王女が法を話しても、国王の邪見を放棄させる事ができなかったのも、梵天王が王宮に降臨して、もう一度説明したのだという事を。人々は、国王が邪見を捨て去る事を、非常に望んだ。ある種の人々は、梵天王の説法に対して、非常に熱心に注意深く聞いた。梵天王は、神通力でもって、全国の人民がみな、彼の天堂（＝天界または天国）と地獄に関する法を聞けるようにした。皆は悟った——国王の邪見は将に捨て去られるであろうと。

皆が喜びに溢れている時、梵天王はまた、人々のために、天界に生まれる因についての話をした。布施、持戒、午後食事をしないなどは、天界に生まれることの出来る因である。国王は聞いている内に、呆気にとられた。彼は思い出したのである。ルサーもまた、天界における各種の殊勝なる事柄を話してくれた事を。梵天王が天界の様子を話すのを聞いた後、国王は、裸体外道の邪見を捨てる事にし、最終的には「前世がある」「未来世がある」「業があり報がある事」「凡があり聖がある事」の因果関係を信じた。

国王はようやく邪見を放棄した。ルサーが最も喜んだ。梵天王は、ルサーの願いを成就した後、梵天に戻って行った。

### 善業の実践

この物語から、我々は、仏教の教法の中において、現在造（ナ）した善業の果報は、現世で熟すとは限らない；ただ重業の、その果報だけが、次の世において熟すのだと言う事が、決定的に言えることが分かる。重い善業とはすなわち、禅定を修習する善業を言い、この種の善業は、疑いなく未来において、果報を生じせしめる；重い不善業は父親殺し、母親殺し、阿羅漢殺し、サンガの和合の破壊、仏の身体を流させる等の五逆罪である。

これらの悪業は、疑いなく、悪道へ落ちる果報を引き起す。その他の業は、熟す時期を待って、ようやく果報を生じせしめる。今生において、我々は、善の果報の時機と、因と縁を善く把握して、己自ら、他人には替って貰えない所の種々の善行を、身をもって、実践しなければならない。《発趣論》において、業縁は、果報縁に付き従って、果報をして、熟せしめるものであると言う。業縁と果報縁は、時節因縁が熟して初めて、果報は現起（現象）するのである。この部分は明日、お話する。

Nān āppakār a ṭh ān āni bodhit ānettha mininā  
Anantanayapa ṭh ānam vande anantagocaram (原文ママ)

### 礼賛

この意味深い《発趣論》の内において、無上の牟尼と称号される大覚世尊は、因縁、所縁縁等の諸法でもって、先に、一切知智によって、遍知した後、一切の衆生にも、これらの法義を知らしめた。私は一生のうちに一度、このような得難き殊勝なる教えに、出会う事が出来た。誠心稽首し、無辺なる智慧を有する仏智に礼拝する事によって、初めて広大で奥深い《発趣論》に遊ぶことができる。



## 第二章 業縁と果報縁（二）

---

### 持戒と布施

次に、「業縁と果報縁」について、詳しく説明する。三宝門の内、もし「業と業果」について、善く掌握しないのであれば、どのような事柄も、目標に到達することができない。あなた方法師は、法師であるならば、必ず「業と業果」について、よく理解しなければならない。そうして初めて、善法の内生きることができる；三宝を護持する優婆塞、優婆夷たちもまた「業と業果」を、理解しなければならない。一般的に、仏教徒は「業と業果」について、よく理解しておらず、また理解しようとはしない。故に、彼らは、己のなすべき事について、ただ布施をすればよいのだと思い込んでおり、「業と業果」のうちで、布施よりも大事な事は、持戒であるという事を、理解しない。

実際、我々は、いついかなる行動においても、たとえば、売買、商売、人的交流などにおいて、みな持戒が、基礎となっているのである。戒の基礎の上に、己の出来る範囲で、または己の興味のある事柄について、布施をするのであれば、その感得する所の果報は、更によいものになるであろう。もし、ある人が、完全に持戒をしておらず、もっぱら布施だけするのであれば、このような人が（未来において）生を得て善に趣く事は難しいと思われる。

### 善心の重要性

私個人は、常に、以下のように考えている。法師たる我々は、時代の要求に従って、法義を教授しなければならないし、また、そのような心がけをもって、授業をしている。先ほど、法師方が朗読した偈頌の中に、もし、持戒を修行の基礎にしないのであれば、その修行は進展しないであろうと、述べられている部分があった。持戒とは、仏法を学ぶ基礎である。三宝のうちにおいては、善心をば、まず尊ぶべきである。善心がないのに、出家するという事は、間違った行為である。比丘になりたい人も、沙弥になりたい人も、善法を生じせしめる事のできる善心を、第一におくべきである。まず、善心が第一である事。しかし、善心をもって、何をなすべきか？ 二番目に来るのは、持戒である。10番目になって初めて、経典の研究が登場するのである。一般の人々もまた、このようであればならない。

己自身に、善心が生じるよう、努力しなければならない。貪心が重い人は、己の貪心を減らすよう学び、努力しなければならない；瞋心が重い人は、己の瞋心を減らすよう学び、努力しなければならない。驕慢（māna）心が重い人は、己の驕慢心を取り除く努力をし、また嫉妬心（issā mācchāriya）も、それが無くなるまで、努力しなければならない。これが実践できて、初めて、「善」の心（+を持った）という事が出来る。

この善心の基礎の上に立って、己の能力の範囲内で、出来るだけ布施をする事、特に、貧苦の人々に対して、布施をするのがよい。先に布施による福を修し、その後、その他の法門を修習 (bhavana) をする。

業力は我々と共に

(あなた方が) いまなお、修行と学びの順序を理解しないので、私は、「業」が如何にして「業果」を形成し、また「業力」は、如何にして我々に付き従うのかを、説明する。(＋あなたが) 造 (ナ) した功德と非功德——業はすなわち「思心所」であり、それは生起し、その後、消滅する。今、私は、善意に満ち溢れた思心所でもって、みなさんに説法をしているが、その説法の過程自体において、思心所は、不断に生起しては、滅し去っていく。後ほど、私が、己の住まいに戻った時、この思心所は、ほとんど滅し去って、継続する事は、ない。

ここにおいて、思心所という業は、どのようにして、衆生をして、新しい生命を齎しめるのか？ (＋という疑問を提起する)。この現象は、多くの人々に疑問を抱かせ、多くの人々は、この疑問を、解決する事ができないでいる。前に私は「善速行心」(kusalajo) と「不善速行心」(akusalajo) について述べたが、速行心は、他の心とは違って、それは非常に強烈なのである。たとえば、熟睡している時の心は「果報心」(vipākacita) というが、果報 (vipāka) は、前世の業によって生じた果報の事である。

(＋我々が) 熟睡している時は、唯一、前世の業の果報のみが、生じている。この果報心は、非常に安定していて、静かである。速行心は全くの反対で、それは非常に活発で、異熟心のように静止している、という事はない。たとえば、私が今、声を出している時の心、その心の中には、相当に多くの、速行心が含まれている。というのも、これらの速行心の激発によって、声が、相当、明晰に出るようになり、そのことによって発声ができるようになるからである。速行心の激発は、声をば、相当明晰にならしめるが、それは、録音を希望している人がより良く録音できる為と、在席の法師及び居士の方々全員に、法の義を理解して頂きたい (＋という私の心遣い) が故である。私は、ただ単純に声を出すだけでなく、心理的にも、各種の気遣い、期待が含まれているのだが、気遣い、期待が、最も多く含まれる速行心の内、思心所は、最も強く力があるのである。

「思心所」とは、責任者のようなものである。たとえば：ある一場の会議において、そこには必ず主席、責任者、会員たちがいるものであるが、これらの人々の中で、最も責任が重いのは、責任者である。彼は、会場全体にかかわる諸々の事柄を処理し、スケジュールを管理し、参加者が、最も素晴らしい成果を得られるように、非常に努力する。主席は会議の司会を担当するものの、最も気遣いをし、心を砕くのは、責任者である。



註釈書 (a ṭhas ālinī aṭhakathā マ) には、どのように説明されているであろうか？ 「思心所」は、助教のようだ、と言う。授業をする時、教師は、授業だけ担当すればよいが、最も苦勞するのは助教である、と言う。彼は、教室内の秩序を保たねばならないし、学生たちが学習に専念できるよう、学生たちの管理もしなければならない。助教は、彼自身も教師の授業内容を聞かねばならないだけでなく、その他の学生よりも尚、しっかり学ばなければならない。

「精進」 (vīriya) もまた、心所の内の一つではあるが、しかし、最も力のあるのは、「思心所」なのである。故に、(十人が) 何事かをなしている時の「思心所」は、その他の心所を帶動する。というのも「思心所」は、主要な首領であり、であるからこそ、業と呼ばれるのである。善であっても、不善であっても、業を造(十)す時、「思心所」は、善または不善をなす所の、業の当事者なのである。一つの例を挙げよう：たとえば、多くの人々が輪になって、一人の人間を打ち殺そうとしている、とする。その内の一人が、最も強く力があって、その人間を打ち殺したならば、最終的に裁判になった時、(+犠牲者を) 生きながら打ち殺してしまったこの人物が、最も重要な犯人である、という事になる。これは、不善業関連の思心所である；善業も同じように、思心所が、最も重要な役割を果たすのである。

思心所と信、精進、念、慧は、みな共に、同じ心所であるが、しかし、一つ一つの事柄において、思心所が(+一番)、主要な役割を果たしている。こうしたことから、「業」は、(+上記五項のうちの) どれに当てはめるのが、最適であろうか？

Cetanāhaṃ bhikkhave kammdṃ vodāmi (マ)

仏陀は「思心所」を、「業」であるとした。故に「思心所」を、業と呼ぶ。当然のことだが、思心所は必ず消滅する(滅し去る)。これは、名法と色法 (nāma rūpa) が、元々から消失する(滅し去る)(+性質を持つ)が故の、自然な法則である。指をパチンと鳴らす一瞬の間に、無数億個の思心所が生じており、それは、生じる事があれば、必ずや、滅する事もある、という訳である。この、刹那に生・滅する思心所は、無数の劫を経ても、機会がありさえすれば、果報を、熟しせしめる事が出来るのである。これは、一般の人々の考えられる智慧ではなく、故に我々は「そんな事は可能であるだろうか？」と、疑惑を持ってしまう。

思心所は、どのようにして、次の生命における果報に、影響を与えるのであろうか？ ここにおけるキーワードは、智慧である！ 仏法がいかに殊勝である事か！ いかに尊敬に値するものであるか！ 仏陀の正遍知智は、いかに仰ぎ見るに値するものか！

今、我々が身近に接触できるすべての法義は、みな、仏弟子たちが、法義を更にこの上なく明確にする為に、仏陀に再三再四、説明を願った法であり、大迦葉尊者が結集を主宰した後、経典は初めて、伝承される事となった。その後、歴代の祖師大徳方が、何度も註釈を重ね、我々の代に及んで、相当に明晰になったものである。今、私が理解している所のものを、あなた方と共に、享受したいと思う。

業力が残すエネルギー

Santānetam kammaṃ nāma na nirujjhati sabbaso

Savisesaṃ nidhetv āpi samayami vipaccitum (ママ)

衆生の身・心（蘊流：生・滅する名色法）において、善であったり、悪であったりするこの思心所——業は、自然の法則により、因と縁の生・滅に従って（+生・滅するものの、それは決して）完全に、徹底的に、空で無なる状態にまで、消失する訳ではなく、それは、己自身（有情の生命？）の存在の基礎とする為に、鋭利で確実なエネルギー（業力）の真髓（業縁）を、蘊流の中に潜伏する。名色法は、因と縁の消失に従って消失するものの、しかし、思心所は、潜在的余力を保つという状況に対して、我々は、深く思惟すべきである。

蘊流の中に潜在する業力は、たとえば、父母が子供に残す影響力のようである。ある種の父母の影響力は、子供の一生において、その人格に影響し、子供を見ると、父母の影を見ることができ、皆は、彼の父母が誰であるかを知ることができる。これは父母の影響力が子供の上に残留したのだ、と言える。しかし、ある種の父母は、子供に全く影響を及ぼさない場合もある。もう一つ別の例では：もし、帝釈天王が死んだならば、別の天人ではなく、必ずや、彼の長男が王位を引き継ぐであろう。なぜであるか？これこそは、彼が長男に残した潜在力であり、潜在力とは、なにか実体のあるモノではなく、一種の力を言う。

どのような状況の下でなら、エネルギーは残留するのであろうか？  
熟睡している時の心は、夢さえ見ていないが、この種の心の生・滅は、身体上に、何等の潜在力を残す事はない。熟睡の心は、流れ流れて、各種の（+もやもやとした）状態を見ることはできる。心は不断に生起しているものの、しかし、この心は頼りなく、専注力もなく、故に何等のエネルギー、潜在力を残すことはない。我々が今、説法をし、また聞法をしている心、その速行心はすでに滅し去ってはいるものの、聞法と説法（+によって生じた）所の、潜在的エネルギーとは、異なるものである。

それが残す効用とは、機縁が熟した時に、果報を生じせしめる、という事である。このエネルギーは、単独では果報を生じせしめる事は出来ず、多くの因・縁の条件の助力によって、初めて果報は生起するのである。前に述べたように、唯一「重業」のみが、いかなる因と縁も必要とせず、果報は熟して現起（現象）するのである。不善法では、たとえば、父親殺し、母親殺しの「重業」は、その他の助縁を必要とせず、彼をして無間地獄に落としめるに十分なのである。これは、父の恩は山より重く、母の徳は海より深いからである。父母の子女に対する恩徳は特別に重く、（+父母は子供に対して）細かく気配りしているものであって、父母を殺害する者の、その行為が残すエネルギーは非常に強く、彼をして無間地獄に落としてめて、苦を受けさせる事になるのである。

善業に関しては、たとえば、すでに禅定を得た業、この生で禅定を得た人は、次の生の果報は、必ずや善であり、これは非常に大きな善業となるものである。もし重大な善業ではないならば、時節、因・縁が熟した後初めて、果報は現起（現象）する。この種の業力は、すなわち、蘊流の中において潜伏するエネルギーである。衆生の身・心において、この善いか、または悪い思心所——業は、自然の法則によって、因と縁に従って、止まる事無く、生・滅、生・滅し続けているのである。しかし、その生・滅は、完全に、徹底的に消失するのではなくて、業に属する所の思心所が残す、潜在的な余力は、機縁が熟すのを待って、果報を現起（現象）せしめるのである。思心所は、衆生の蘊流の内にエネルギーを残留させた後ようやく、生・住・滅の準則に従って、滅し去るのである。善哉！善哉！善哉！

### 波羅蜜 (pāramī)

次に、「業」、「布施業」と「布施波羅蜜」の「エネルギー」について説明する。

世間的な栄華富貴を祈求する業は、波羅蜜ではない(Paranam es ā pāramī マ)。

「波羅蜜とは、高尚なる者の財産であり、波羅蜜とは、高尚なる者の、習慣的な行為である」

菩薩、仏陀の大弟子 (mah ās āvaka マ)、第一弟子 (aggas āvoka マ)、または比丘、比丘尼等になりたいと発心する者は、善業を累積しなければならない。善業を累積するという事は、決して世間的な幸福を得たいが為ではなく、今すぐに道智、果智、涅槃智を修習し、かつ己自ら、道、果、涅槃を見る事を言う。この方式で布施、持戒などを修習するのを、波羅蜜と言う。



### 布施波羅蜜 (dāna pāramī)

普通の人でも、波羅蜜を累積することはできる。しかし、生命が輪廻するなかでの幸福を祈求する為に、波羅蜜を修するのは、よくない。どのような事柄を實踐していても、純粋な心でもって、道智、果智、涅槃智を得るために實踐するのが良く、このようにして初めて、波羅蜜を累積することができる。世尊がいまだ仏になる以前、菩薩であった時、三大阿僧祇劫の波羅蜜を累積し、また、その時初めて、布施波羅蜜の修習を開始したものでなく、それよりももっと早くから始めており、その結果、世尊は、非常に多くの、波羅蜜のエネルギーを蓄えていたのである。

世尊の、波羅蜜の修習に用いる心、思心所、速行心はすでに、因と縁に従って滅し去っているものの、しかし、そのエネルギーは、すでに蘊流の中において、保たれていたのである。一生毎、一世毎、毎回の布施、その布施の心、心所、思心所、速行心はすでに滅し去っていても、しかし、そのエネルギーは温存される。彼が、ヴェッサンタラ王 (Vessantara) になったその一生において、布施波羅蜜などは、すでに円満具足し、次には兜率天に生まれて、一生補処の菩薩となった。その後、兜率天から人間社会にきて、シッダッタ王子 (siddhattha マ) になり、かつ、この一生において、果を証して、仏になった。このように、修行の道において、果を証して、仏になりたいと思うのであれば、波羅蜜と善業のエネルギーを累積するのは、決して欠かす事のできない行為なのである。

### 慈波羅蜜 (mettā pāramī)

世尊が、王宮を離れて森林に向かったあの時、彼は一体、何をしていたのであろうか？彼は、慈心を発散していたのである：「願わくば一切の衆生が楽しく、安らかでありますように」と。彼が仏道を成就しようと思ったのは、元から大慈大悲の為であり、故に彼は、覚悟 (= 悟り) の為の修行に努力して、無量無辺の衆生を救おうとした。彼は、森林の中で慈心を修習し、「願わくば一切の・・・」の慈心を発散した。これら願力の速行心は、已に滅し去ったが、しかし、速行心のエネルギーは、不断に累積されたのである。仏陀は、一世毎に慈波羅蜜を修習する事によって、最後に仏陀になったその一生において、慈波羅蜜は、円満具足したのである。

### 諦波羅蜜 (saccā pāramī)

諦波羅蜜は、話される言葉がすべて真実である、事を言う。話す事、為す事が皆、真実である。仏陀がいまだ、仏になっていない以前、不断に諦波羅蜜を累積し、仏陀に成ったこの一生において、諦波羅蜜は、已に円満した。諦波羅蜜のエネルギーが、蘊流の中に保たれているために、諦波羅蜜は円満する事ができたのである。

もし、エネルギーが溜まる事無く、只管（+身・心が）生・滅するだけであるならば、諦波羅蜜が円満する可能性はない。このことから、波羅蜜の円満は、エネルギーの残留があるが故である事が、分かる。

### 慧波羅蜜 (paññā pāramī)

私の一生における行為は、みな、智慧と相応した善業である。皆さんの為に法話し、書く事は、智慧と相応した善業である。私は、どのように法話すればよいか、どのように書けば、法師および居士の方々に、容易に理解して頂けるか、常に考えている。このように思考する事は、慧波羅蜜であり、その思心所は、すでに滅し去っているものの、エネルギーは蘊流の中に残留している。私の生命における輪廻の内に、いまだ涅槃を得ない前、役に立たない、馬鹿で愚かな低賤なる果報を、決して得ることはないであろう。私が薫習して来たのは、すべて智慧と相応した善業であるため、今生においては、このような私に、なる事ができた。以上の事を理解する事は非常に重要である。

### 無間縁のエネルギー (anantarasatti)

これら残留したエネルギーは、如何にして、我々の蘊流の中に、付き従うのか？  
今、あなた方は《発趣論》を聞いていて、（+内容について）多少の目鼻は、ついていると思われる。心は、無間縁の力によって、不断に生・滅、生・滅しているが、その前の心が生起する時、エネルギーもまた同時に生起している。これらの心自体もエネルギーを擁している。この点は少し難しいかも知れない。みなさんが理解してくれるのを期待している。

前の心が滅すると、後ろの心が生起するが、後ろの心が生起する時、前の心のエネルギーもまた同時に生起する。我々は、このエネルギーを己自身で点検することができる。どのように点検するのか？ 我々は、言葉を話す能力、行動する能力、商売をする能力等を擁しているが、我々は、これらの能力に実体があるとは思わないし、重量があるとも思わない。能力は、どれほど多くても、重すぎるといような事はなく、実体はないながら、しかし、我々は、能力の存在は感じ取っているのである。衆生の蘊流と菩薩の蘊流の中において、心は不断に、絶え間なく、相続が生起しており、ひとつづつの心のエネルギーもまた、相互に感染しあい、相互に影響し合っているのである。みなさんは、この心のエネルギーは、消失することはない事を、理解しなければならない。



Santā の意味：

衆生の身・心（蘊流）において、ある時には善であり、ある時には悪である所の思心所——業は、自然の法則によって、因と縁に従って生・滅する時、徹底的に空（＝空っぽ）、無の状態にまで消失するという事はなく、己自身の存在の基礎として、鋭利で着実なエネルギーの真髓（業縁）は、蘊流の中に潜在するのである。

怖れる必要はない

上に述べた道理に関して、我々は、怖れる必要はない。喜んでいいくらいである。無始以来の過去世の中で、我々はどれほど多くの悪業を造（ナ）したか分からないくらいであるが、また、どれくらいの善業を造（ナ）したかも、分からないくらいである。善業であっても、悪業であっても、そのエネルギーと潜在的な力は、みな、我々の蘊流の中に、付き従っているのである。この生命の流れの中に、我々は、どれほどの善業と悪業を、なしたであろうか？ 私はこのように考える：我々の身・心の中に、今即刻、熟すべき重業はないようである。もしあるのであれば、果報はもっと早くに熟したであろう。父親殺し、母親殺し、阿羅漢殺し、サンガ和合の破壊、仏身の出血等の五逆の罪は、私の身・心には、ないようだ。居士の方々も私と同じように、現生において、熟すべき重罪はないようなので、怖れる必要は、ない。

善の実践

今、我々に重業がないとしても、しかし、我々には、時機と因縁が熟した時、果報が現起（現象）する悪業があるかも知れない。しかし、心配する必要はないのである。ただひたすら、多く善を実践するのがよい。というのも、悪業の果報は、勝手に現起（現象）するものではなく、それは時機因縁を待たねばならないが故に。善業の道理もまた、同様である。我々の生々世々の心は絶え間なく生・滅しているが、エネルギーは、絶え間なく我々の蘊流の中に累積して、永遠に我々に付き従っているのである。

臨死（＝臨終）業（āsannakam 𑖦𑖩）の果報

我々は、臨終のときの事を考えてみよう。例えば、あと何秒か後に、死ななければならないとか、または、何かの病気の為に、今、死に往かんとしている、とする。この時、我々に付き従っているのは、唯一、善または悪の業力だけであり、その場合、善業と悪業の中では、どれが優先的に、結実するであろうか？ これは非常に重要なポイントである。我々は、所縁縁の境とは何であるかを、理解しなければならない。もし、境がないのであれば、我々の心は生起することがない。心には境が必要であり、それがあって初めて、心は生起する。

臨終のまさにその時、もし重業がないのであれば、臨死業が優先的に果報を生じせしめる。というのも、それが最も、死亡心に近いが故に。臨終の時、我々の神智は、はつきりしなくなっているが、しかし、我々の心は、尚、ある種の境の縁によって生起する。もし、その時、所縁となった（+対象）がよくないものである時、この境に関連する業は、その機縁を得て、その時、熟するのである。

### 臨終時の重要性

考えてみようではないか。我々の、今ある命を、掌握するのが如何に重要であるか、臨終の時もまた、如何に重要であるか、という事を。大部分の家庭では、経済、子供、親戚、友人などなどの問題から離れる事ができないが、我々は己自身に問うべきである：安心して、往生する事が、出来るであろうか？と。

我々の知り合いの、ある一人の老居士が、お寺に来て、齋戒しようとした。これは非常に良い事である。私は、彼女に、ここままするお寺にいて家に帰らず、お寺で、午後食事しない戒律を守った方がよい、言った。万一、家で亡くなった場合、私は、彼女が善趣へ往けるかどうか、保証する事ができなかったからである。もし、お寺にいたならば、薫習されるのはみな、心識を静かに、安らかに整える仏法であるから、私は、彼女が善趣に往生するのを、保証することができた。しかし、彼女は、私が家に帰らないように勧めたのが、気に入らなかったのか、彼女は、二度とお寺に来なくなり、暫くして、亡くなった。

私は、在家の人々の状況をよく理解しており、故に私は、彼女にお寺に住むように勧めたのだが、彼女の決定は彼女のものであって、私は、私自身の責務を、果たしたと思っている。臨終の時、我々は、己の住居、周りの日用品、己の家、己の家人、親戚、友人などを見るが、彼、彼女たちが、哀悼の表情を表す時、これらは皆、死に往く者にとっては、困惑となる。どれほど善良な人であっても、何事か、心に掛かるものがあれば、影響を受けるものである。私も年をとったが故に、私は、特に、私と一期の生命を同じくする老人たちが、どのようにして、生きて来たのかを、観察する事が多い。

ある居士は、修行仲間と喧嘩をし、その後間もなく往生した。二年後、彼の霊魂は、他人の身体に憑いたが、その性格は、彼の生前のものと同じで、己の所有物を探したりした。家人は彼に問うた：

「あなたは、転生しない前は、何でしたか？あなたは、どこに住んでいますか？」

彼は答える：

「私は死んだ後、鬼道（＝幽霊）の衆生になった。この町の、この通りに住んでいる」  
問：「あなたは、人が怖くないのですか？」

答：「怖くなんかない！人々は人々の範囲内で生活しているし、我々鬼（=幽霊）は、鬼の領域で生活している。小さな子供は少し怖い。というのも、子供は悪戯をして、石や棒を投げるので、我々の身体に当たる事があるから」

「鬼の仲間たちも、群れを成して、この通りで遊ぶこともある。通りのお母さんたちは、齋飯を供養した後、回向するので、我々は善哉！と叫ぶ前に、飯、バナナの取り合いをして、食べる。物を食べると、みな大喜びだ」

彼らは餓鬼ではないので、飢餓と燃焼の状況にはない。故に、鬼（=幽霊）たちは楽しく遊ぶ。彼らは、自分がこの通りに住んでいると言い、私はそれがすぐ近くだという事を知っているが、通りの名前は、言えない。実際、すべての村、町、市には、非常に多くの、鬼道の衆生が住んでいるものである。

（中略）

給孤独長者（Anātha piṇḍika）が天子に

仏世の時代、給孤独長者という人がいて、臨終の時、シャーリープトラに頼んで、説法をしてもらった。彼は己の心が、不断に生・滅、生・滅しているのを観察し、善心が、全身に遍満した。それは、死心が生起した後、結生するまで続き、久しからずして、彼は、トウリ天に生まれて、天子になった。彼は、自分がどこから来たのかを、思惟した。そして、自分は人間界から来た事、大いなる護法者であった事を思い出し、非常に嬉しく思った。彼は、天宮に入る前に、もう一度、人間界に戻って来た。

Idaṃ hi taṃ cetavanam̐ Isisaṃghanisevitam̐

Āvuttam̐ dhammar āhenap̐ iti sañjananam̐ mama （原文ママ）

己が供養した祇園精舎に、仏陀が住まわれているのを見て、非常に喜びを感じた。彼は、臨終の前に、生・滅を観ていたのであるが、シャーリプトラの説法を聞いていた間も、生・滅を観じていたのである。善心所と善速行は、彼の心識流の中に存在しており、故に、臨終の時の善心は、非常に顕著であった。無間縁が彼を支え、死心の後、即刻、トウリ天に結生したのである。トウリ天にいる間、このエネルギーは、消失することはない。

この例に鑑みて、私は、己の身体と生命を軽んじることを恐れるようになった。というのも、私は、非常にはつきりと、業力は消失しない事を知っている事、唯一、業だけが、己自身の資具（kammakā）である事を知っているが故に。あなたが、どれほどの富を持っていようとも、一たび死心が来れば、それらは皆、放棄しなければならず、毛筋一本も、持っていく事は出来ない。もし、それらを放棄する事ができないのであれ



ば、鬼道（＝幽霊道）に結生し、生前に己が所有していた物品を守り、そこに纏わり付き、別の場所に往生する事を拒む。通常、人は死ぬ時、神智が朦朧となり、朦朧とした心は、必ず、境と共に歩むようになる。これらの境とは、金、銀、珠宝、家、子女、親戚、友人などなどである。平時の時に、どのような境を気に掛けているか、臨終の時には、その境が顕現する。もし、心が境と共に歩んだ場合、彼の次の一生の結生の優先順序は、必ずや鬼道または悪鬼道の衆生であるに、違いない。

法師として存在している我々であっても、例外ではない。たとえば、どこかの徳が非常に吝嗇で、何等の布施もした事がないのであれば、彼は死後、そこから（＝鬼道）超越する事はできないのである。究極的な法性——常法（paramattha）とは、僧俗と畜生を分けることはない。一般的な人々は、放棄できない、手放せない何らかの気がかりがあり、それは、地獄に落ちて苦を受けるまでにはいかないけれども、しかし、鬼になって、地獄の看守になるかも知れないのは、大法師であっても、例外ではないのである。もし、放棄できない、手放せない気がかりがあるのであれば、地獄に落ちないにしても、しかし、鬼道の衆生には、なるのである。故に、私は皆様に、業力が心識に付き従う状況をよく理解するよう、再三再四、強調するものである。

業力が心識流に付き従う様子

輪廻の輪の中において、業力は、止まる事を知らぬげに、我々に付き従う。そのように、正に業力が付き従う為に、菩薩たちは、一生また一生と、波羅蜜を累積することができるのである。すべての波羅蜜は皆、菩薩の心識流に付き従い、消失する事が無い。たとえば、仏陀の前生、彼が Vessanatarā 王であった時、仏陀に成るために具足しなければならぬ持戒の波羅蜜は、すでに円満具足していたのである。

心配や執着は鬼道に

臨終の時、少しばかりの悪業であっても、彼の以前に造（十）した善業の影響を弱める事になる。たとえば：財物に執着すれば、人をして不自由にするし、財物と親族は、人々を鬼道へと向かわせる。財物に執着すれば、その人間は、餓鬼道に生まれることになる。僧侶が、己の弟子、居士に情をかけて捨てがたい場合、または、己の道場を捨てがたい場合など、彼は鬼道に生まれて、その付近に留まり、生まれ変わる事を拒否するであろう。

礼賛（重複に付き略）



### 第三章 業縁と異熟縁（三）

---

仏教の経典——

仏法は、その最も初期において、大迦葉尊者（Mahākassapa）が結集を主宰する事によって、伝承されて来たものである。次に、大智慧者なる祖師大徳の方々が、（+その内容を）何度も繰り返し研究し、整理してきた。現代に至って、仏法は非常に明晰に、また整ったものになった。故に、我々が現代においてしなければならないのは、一門に深く入るようにして、それを研究し、それを体験し、それを実証しなければならないという事である。

経典に言う：臨終の時には、三種類の境が出現する。すなわち、「業」（kamma）、「業相」（kammanimitta）と「趣相」（gatinimitta）である。（+出現するのは）その内の一つであるか、または二種類であるか、また三種類共出現する可能性がある。故に、皆に、振り返って観察して頂きたい・・・あなた方の家族の中で、往生した時の、その様子を。上記の事柄は、経典に基づいているのではあるが、しかし、経典は、人生に起こる状況を、書き写しているのである。

経典の中の業因

業因とは、先に造（ナ）された業の事である。たとえば：かつて、僧侶に道場を建造して、供養した事のある人、彼が供養をするその時、善の思心所は、比べるもののない程、清らかであり、喜悅に満ちたものであったに違いない。彼の臨終の時、この善思心所は、彼に同じような心境を齎し、彼を善趣に往生できるように引導する。故に、私は常々、皆に善き事を実践するように、と励ますのである。たとえば、道場の開眼供養の発心、またはその他、己自身の能力の範囲内において、実践する事のできる事柄への発心、なるべく清らかな善事をなすのが良い。

世間的な付き合い、応酬では、善の思心所を生起させるのは、非常に困難であり、臨終においては、その心境は混乱し易い。故に、平常から練習しておく必要があるのである。付き合いや応酬で行う善事は、善心所の力が弱いだけでなく、悪心所もまた増大する事がある。このような悪心所は当然、小さいながら、悪報を免れる事ができない。

故に、皆には、清らかな心念で、善を実践する事を、忘れないで頂きたいと思う。たとえば、今朝の托鉢においても、法師たちが、整列して隊伍を組んでいたのを、居士たちは見たが、それによって心内には供養したいという清浄心が生まれ、手に斎食を捧げて、法師の供養を心内に思い描き、この功德が、涅槃の成就の助縁になるように願う（nibbānapaccayo hotu）。

その後、供養の時の心境を思い出す時、善の心所は、絶える事無く、湧出するのである。悪業もまた同じであって、悪を造（ナ）した時の状況を、不断に思い出すものである。もし、かつて殺人（pānātipāta）、偷盗（adinnāta）、妄語（nusāvāda）等の悪業を造（ナ）した事があったならば、臨終の時に、これらの悪業の境が、一つ一つ顕現する。この時の心境は、悪を造（ナ）していた、その時のと同じで、我々の心は、非常に容易に境に影響され、引き込まれてしまうものであるから、（+輪廻の先において）当該の悪業が感応する所の、もう一つ別の生命の果報体に、引き込まれてしまうのである。凡夫の身である我々は、悪を造（ナ）す機会を減らす努力をしなければならない・・・少なくとも、重大な五逆業だけは決して、造（ナ）してはならない。日常における微々とした貪・瞋・痴を、完全に断じ除くのは難しい為、これは徐々に訓練すればよい。

#### 重業、臨死業（=臨終業）、慣行業（=習慣業）による果報の生じ方

過去世における、どのような業であっても皆、今生での重業（garukam）の果報（+の生起）を、止める事はできない。もし、今生において、善なる重業がある時、たとえば、禅定（jhāna）を得るなどであれば、臨終の時、疑いもなく、それに相応する定の境が、現前する。反対に、重大な悪業、父親殺し、母親殺し、阿羅漢殺し、サンガ和合の破壊、仏身の流血等の五逆罪は、臨終の時、疑いもなく、これらの境が現起（現象）し、彼をして、無間地獄に落とす。このような重業は、我々は目下の所、絶対に擁していない（+ようである）。

#### 臨死業

我々にもし、重大な善、悪業がないのであれば、臨死業（āsannakam ママ）の果報が、優先的に生じる。臨死業とは何か？ 過去に造（ナ）した所の善業、たとえば、布施、持戒、聞経、聞法などなどの、善業である。通常、我々には、重大な善業も、重大な悪業もない場合が多いものであるが、その時は、臨死業に従って、結生する確率が、非常に高くなる。

#### 慣行業

もし、我々の、この一生の臨終において、どのような臨死業もないのであれば、我々は、この一生の間になした、習慣的行為の慣行業（āciṇṇakam ママ）によって、結生する。法師方の慣行業とは、法の実践、法の理解に関する修行、厳密な持戒、経典の教授と、仏法の宣揚等、<正法の久しく住むため>の護法が、法師方の、慣行業である。居士たちの慣行業は、何であろうか？ 毎日、僧（=サンガ）に供養し、花を供え、仏に礼拝して、各種の功德を行う、これらは居士方の、慣行業に属する。臨終の時、もし他に、何らかの臨死業がないのであれば、我々はこの一生における習慣的行為・・・慣行業によって、結生する。

不善の非功德なる業、たとえば、畜生の殺害を生業としていた、他人の財物を偷盗した、他人の家庭を侵犯した、名誉・利益の為に、詐欺をしたなど等の、不善なる行為は、すなわち、非功德業である。たとえば、ある人が、非功德的な行為でもって、生業を経営していたならば、この人間の臨終の時に、もし、善と不善の臨死業が、出現しないのであれば、疑いもなく、今回の人生における、非功德慣行業に従って、結生する。法師であっても、居士であっても、常に復習し、「業」について、よく理解しなければならない。

上に述べた「重業」、「臨死業」、「慣行業」という、この三種類の業は、皆、現生で造(ナ)した所の、「業」に属する。これ以外に、我々が、一生の中で造(ナ)す「業」というのは、はそれほど多くはない。臨終の時に、この三種類の内の一つの業もない時、過去の無始なる劫より、我々の心識流の中において付き従っている所の、無意(=無意識)の業が、果報を生じせしめて、我々をして、もう一つ別の一期の、新しい生命へ向かうようにと、引導するのである。

#### 来世の幸福

皆さんに覚えておいて欲しい事：来世の幸福は、必ずや、今生の努力によって、功德業を累積する事でしか得る事ができない。もし、今生において、しっかりと、清浄なる功德業を累積したならば、我々は安心することができる・・・来世において幸福——善趣を得る事ができる、と。

#### 業相の現起(現象)の状況

人が死ぬ時、今生の各種の行為を思い出す。すなわちそれは、今生に造(ナ)した業の状況であるが、それを業相(kammanimitta)と言う。たとえば：布施・供養が好きで、過去に道場を建造して、三宝に布施した人事のある人は、臨終の時に、己の造(ナ)した功德の行為を思い出すが、その事によって、善の思心所が、不断に生起する。この時の心情は、布施を修していた当時と全く同様に、喜悦に満ちたものであり、これが彼の、業相である。

もし、過去に造(ナ)したのが殺業であれば、臨終の時に、殺生の業の状況が現前する。これは業相であり、業相は、業ではない。業相とは、造(ナ)された業によって、現起(現象)する境のことを、言うのである。ある種の人々は、臨終の時、種々の、非功德の業相が、出現する。ある時は、神智が朦朧として、失神してしまう事もある。その時に、他人が色々とはたらめな話、悲しい話をすると、また目が覚める。目が覚めると、今生における、己の良くない行為の状況を思い出して、懼れ、恐怖と悲哀を感じるのである。

ある種の人々は、一生善を行い、臨死の時の昏迷状況の下で、種々の功德の業相が現前し、目が覚めた時は、比類のない喜びを感じる。ある種の人々は、はっきりと己の来世、どこに行くかを観ることができる——これが趣相である。ちょうど須那尊者の父親のように、須那尊者が彼のために仏塔を建立してあげた事が原因で、彼が犬にかまれ、食べられてしまう趣相があったとしても、その趣相が、天女を観る趣相に変わり、地獄相から天堂(=天界)相に転じた、あの物語のように。

こうしたことから、趣相(gatinimitta)は、来世に生まれる場所と関連する境である、という事が分かる。もし、来世、もう一度、人趣に来るのであれば、臨終の時、あなたは、赤い羊水に包まれている様子を見るであろう。たとえあなたが、羊水が何であるか知らず、また羊水について考えた事がなくても、あなたはこのような情景をみる。これが趣相である。

#### 無明、愛、行

趣相が現起(現象)する時、我々の身・心の内に、無明と愛があるが故に、「無明」(avijjā)が、この趣の「有」(bhava)の過失(=欠点)を覆い隠し、「愛」(tanhā)が、我々をして、趣有(gatibhava)の方向へと、向かわせる。「福行」と「非福行」の思心所は、行(sankhāra)の方式で存在し、我々をして、もう一つ別の一期の、新しい生命に向かわせる。たとえ臨死業が現起(現象)した所の、次の一期の生命が卑賤な境であるとしても、無明が覆い隠す事が原因で、我々には、一切の過失が見えない。

母胎の羊水を見ると、我々は厭離しないだけでなく、母胎に対して「愛結」を生じさせてしまう——すなわち、生命を求めてしまうのである(bhavanikanti)。今や、三悪墮に落ちそうな人であっても、無明が覆い隠す事が原因で、彼は地獄に対して、まったく恐怖を感じる事が無い。たとえ彼が、それは地獄であると知ったとしても、彼はそれを愛し、それに執着する。というのも、彼の今生の身殻は、もはや使えなくなっており、その「何一つ持たない状況」に、彼はとても耐え難く、適応できない為、故に、三悪趣であろうとも、愛してやまず、手放す事ができない。これが「無明によって覆い隠され、愛結に結縛される」である。

臨終の時は、ちょうど水に溺れるが如くであって、溺水しているその最中、身体にどのようなよい状態、または悪い状態が出ていようとも、藁を見ればそれに掴まってしまうのと同じであって、それが人食いサメであっても、同じように捉まえてしまうのである。というのも、彼にとって、溺水しているのは疑いもない事実で、何かに掴まれば、多少とも生存の可能性があるからである。

臨終の時、よい境、悪い境に関わらず、彼は良しあしの区別なく、境に従って進む。それが悪趣の境であると分かっているにもかかわらず、やはりそれを愛し、それに執着するのである。衆生が、臨終のときの所縁境に執着する時、無明によって覆い隠される。結果、愛結に繋がれて、もう一つ別の一期の、新しい生命に向かう。過去の福行、非福行等の業力は、果報が熟するのを促すような態勢に入る。

臨終の時、我々の心は、心路の遍歴過程の順序に従って生起するが、この時の心所依所 (hadayavattu) (注1) の力は非常に弱く、故に、死心が生起する前、速行心は5回しか活動せず、その次は、彼所縁 (tadā) になる。その後に来るのは死心 (suti) で、一生はこれにて終結する。死心は、この一生における最後の一個の心で、死心の後では、いわゆる業力の行が、再び結生するよう促し、そのため、また別の一期の生命が始まるのである。

(注1) 心所依処：心臓の下端にあり、その特徴は、意界と意識界に依存場所または支えを提供する事。作用は、二界の依処 (= 依存場所) となる事。現起 (現象) は、この二界を支える事。近因は、同一の一粒の色聚の中の業生四大種である。

#### 五趣

地獄趣 (nirayagati)

餓鬼趣 (petagati)

畜生趣 (tiracchānagati)

人趣 (manussagati)

梵・天趣 (devogati)

今、我々は五趣が何であるかを、理解できたであろうか？ もし、仏陀がこの世に現れなかったならば、我々とは言わず、祖師大徳の方々できえも、「五趣」とはなんであるかを知ることが、できなかったのである。「趣」とは、行く場所、往生する処である。世間は、地獄、餓鬼、畜生、人、天等の五つの場所がある。解脱していない人は、死後、業力に従って、五趣の中から、どれか一つの趣に生まれ変わる。五趣の中の、餓鬼趣は阿修羅を含むが、阿修羅は体積が非常に大きく、彼の瞋恚心は非常に重い。故に、彼は餓鬼より苦痛が大きい。



## 餓鬼趣 (petagati)

北丙法師は、非常に優秀な法師である。彼は法を善く説く以外に、種々の業処にも詳しく、よくお墓に行き、説法をしたり、座禅・瞑想する。彼がお墓にいる時、鬼道の衆生は、傍らに来て説法を聞く者、馬鹿騒ぎしに来る者もいるが、ある者は、近くで読経したりする。北丙法師は、遠くから聞こえて来る読経の声を聞くことができるが、それは、鬼(=幽霊)達が法師と共に、読経しているのである。彼らは生前、みな、寺院の法師だったのである！ 彼の座席の傍に、蟻の巣のような小さな穴がある。穴は非常に小さいものの、二人の巨大な鬼が出てきて、一人は南に、一人は北へ走って行った。時間が来ると、二人はまた、元の穴に戻ってきた。

衆生とは、なんとまあ、不思議な事か？ 輪廻の中では、色々な生命が存在し、色々な生存形式が存在している。これらは皆、臨終のときの心の気かりによって(+生じているの)である。臨終の時、もし、家族、友人の事を気に掛けると、みな、鬼道の衆生になり、元の場所に居続けて、そこを離れたがらない。もし、気かりが無いのであれば、業力に牽引されて、流転する。この五趣のうち、鬼趣に生まれるのはまだいい方である。というのも、鬼趣から、人趣に転生するのは、難しくないからである。

人が死ぬとき、泣いてはいけない。もし度したいのであれば、こう言うのがよい：  
「お父さん！お母さん！または誰々さん！ 私はあなたの為に供養を修しています。功德を造(ナ)しています」と。その後、功德を彼に回向してあげれば、彼は、人趣に転じることができる。これは非常に簡単に出来る。ただ、重要な事は、供養を受ける者が、清浄なる戒行を具足している必要があることである。

## 輪廻への理解

十善を保つ事のできない人は、非常に重い貪・瞋・慢(=慢心)、嫉妬、吝嗇等の煩惱を、有しているのが、その原因である。この種の人間は、死後、悪趣に行き、苦を受ける。しかし、もし、あなたが一般の人に：「あなたの、このような行為は、地獄に落ちますよ」と教えてあげても、彼は意に介さないであろう。もし、あなたが彼に：  
「あなたのこのような行為は、警察が来て捉まえますよ。」という、彼は緊張の余り、居ても立ってもいられなくなるであろう。私はある現象を見る：一般の人々は、短期でしか物事をみない事を。

己自身の、生々世々の生命の輪廻に関して、ただ、短い一生の間の名誉と利益、幸福しか追求せず、己の愛する事柄、己の愛に関してならば、一切を惜しまず、代償を払うことができる。来世について言えば、他人はともかく、己自身でさえも、己の来世に、

何らかの準備をしようとは思わない。来世はまだまだ先の事だ、などと思ってはならない。それはただの一刹那でやってくる。皆さんは、己への点検を、怠ってはならない。私は上述の状況のようではなく、経論の法義に関しては深く掌握しているが、その他に、己の未来に対して、準備を怠らないでいる。私の目標は出離であり、名利ではない。法師と居士の方々は、私の修行生活が退屈で、私に親しみたくないと思うならばそれも結構、また、（+目障り故）私に、森の中に退け、というのならば、私はそのようにしたいと思う。

我々は人趣に生まれた。天人は天趣にいる。天趣に生まれた天人は、非常に幸福である。業力は、彼の為になんらの余計な事をせずともよい；同様に、業力は完全に全くもって、地獄の落ちた衆生を救い出す事はできない；畜生道の衆生に関しては、業は彼らに対して無力であり、彼は彼の果報を受け尽くすまで、彼の「有」(bhava) において、生存しなければならない。餓鬼道の衆生は、必ず山林の中において、火で燃やされたり、飢餓、渇きの苦痛を受けているが、我々は彼らを、救う事はできない。人間の近くに住むことのできる鬼（=幽霊）たちの状況は比較的良い。というのも、彼らは人間が普く布施したものを、受け取る事が出来るし、人間の造（ナ）した功德回向も、受け取ることが出来るし、またこのことによって、鬼道を解脱することも出来るが故に。

人に生まれることは、千載一遇のチャンスであり、我々は今、それを得ている。しかし、この人身のうちにおいて、以前の業は、どのような力があって、（+果報の）熟す事の可否を決定することができるであろうか？ 我々は更に一步進んで、己を点検しなければならない。仏陀の教法は、非常に精緻で正確なのである。

業の四つの熟した果報に依る状況

Kalapadhipayag ānaṃ gatiy ā ca yath ār aham、

Sampatti ñca cipatti ñca kammam āgama paccati (ママ)

「趣く先に到達する事」を得ることができるのは、功德業の果報が熟したためである。しかし、我々は依然として、無始以来の功德業と非功德業を持ちつつ、この世間にやって来た。私もまた、非常に多くの功德業と非功德業を、擁している。来世の果報はどのようなものであるかは、今生の行為——業如何によっている。来世の果報は、どのような業によって決定されるのであろうか？





### 趣成熟 (Gatisampatti)

もしも「趣成熟」であるならば、善業が優先となって、得られる果報である；もし「趣敗壞」であるならば、非功德業が優先となって、得られる果報である。

「成就 (マ)」と「負壞」には、各々、四つのグループある。「趣成就 (マ)」とは、たとえば、我々が得た人趣は善趣である。趣成就の内、極めて悪劣な非功德果報は、人趣において、発生する事はない。例を挙げて言えば：人趣は善趣であり、故に、地獄道の衆生は、人類に害を与えることはできない。人類の果報は、餓鬼の衆生とは異なって、食べ物が食べられないとか、水が飲めないとかの事はない。ただ、彼に何かを与えてあげると、彼はそれを利用することができる。その点は、何も食べる事が出来ない、餓鬼とは異なる。故に、人趣は、善趣であり、人趣の功德業は、殊勝なのである。

### 時成熟 (kālasampatti)

単一的な「趣成熟」は、我々に、円満な善果を齎す事は、ない。どうしても、その上に、時節因縁の成就——「時成就」が、必要である。時節は、好い時節もあれば、悪い時節もある。たとえば：あなたが生まれたのがその時代、社会全体が、貧民を支える時代であれば、身が富豪であるべきあなたでも、十分な利益を得る事はできない可能性があり、相当の苦勞を強いられるかも知れない；貧困な人は、貧民を支える時代に生まれたならば、相当に有利な場合もあり得る。ただ、すべてが順調であるとは言えず、一定程度の享受を受け取ることができる、という訳である。

たとえば、得る事ができたのは人趣であり、時代はまた、富豪を支える指向にあつて、資金は増えて、金儲けもスムーズに行く時代であるならば、富豪たちは、何事にも取り組みやすく、非常に安楽に過ごすことができる。時代の成り行きとは、固定的ではなく、随時に変化するものである。

### 依報成熟 (upadhisampatti)

依報とは、我々の色身、容貌を指す。たとえば：子供の容貌が美しく、可愛い場合、父母は必ず、非常に嬉しいに違いない。というのも、彼の依報が良く、そのため、祖父、祖母も嬉しくて「これは私の孫！」と言うに違いない。反対に、この子供の依報が悪い時、容貌は醜くなるが、それでも母親は彼を愛し、彼の世話をするであろう・・・というのも、彼女が彼を産んだから。しかし、父親はどうであろうか？ 祖父も祖母も余り抱きたいとは思わないかも知れない。これが依報の違いによって生じる、差別待遇である。

私は、何度となく強調している。この一生において、なるべく多くの善い事をする事、福報を多く修する事、怒らないこと。常に怒っていると、醜悪になる果報を得る事にな

るが故に。時々刻々、己自身の心に注意を払い、時々刻々、心、思心所が歓喜の光明の中にあるように保つ事。このようにして初めて、莊嚴で美貌の果報を得ることができる。男性であっても、女性であっても、莊嚴に生まれたならば、親戚、友人たちは、非常に彼、彼女らを好み、彼ら、彼女らと交流したいと思う。容貌が莊嚴だけでなく、その上で学識が豊富で、親戚が豊かで、権力や地位があれば、尚更である。このことは、誰が正しく、誰が間違っているのかという問題ではなく、これが<世間>なのである。

故に、あなた方は、依報がいかに重要であるかという事を知っている必要が、あるのである。以前、スリランカの人々は、「牛肉を食べる」事が好きでなかった。ある一つの種族が、この規範を犯して、こっそり牛を殺して食べた。その後発見され、この種族に属するすべての人間は、捉まえられて、苦役に付かされた。彼らが犯したのは、牛を殺すという行為であって、世を震わす大罪でもない。その為に、町の外にあるゴミを掃除するように命令された。この一群の犯罪者の中に、非常に美しい少女がいて、国王が彼女を好きになった。国王は彼女に王宮に入るように命令し、暫くしてこの少女は、王妃となった。彼女の種族もまた、この事によって、解放された。これは「依報」の莊嚴である事の殊勝さ、の例である。このように、功德と非功德によって得られる果報は、「時節」、「依報」の良しあしによって、差別が生じるものである。

#### 加行成熟 (payogasampatti)

業に言及すれば、「加行(注1)成熟」は非常に重要である(+事を強調したい)。「加行成熟」は、身・口・意の造作を言い、その核心は、智慧、精進、正念が同時に並行して、実践されるのを、加行と言う。智慧は、時機因縁の良しあしを覚知して、判断する事、このような時空環境を知ること、己の利益の追求はどの程度まで許されるか?等の判断を、言う。

正念もまた、智慧の覚知のレベルの範囲内において付き従い、時機因縁を念々して、覚知・察知するものでなければならない。そうして初めて、失敗や意外な不幸を招かなくて済むのである。どのような事を為すにしても、必ず「正念」と「精進」による努力は不可欠であり、智慧、精進と正念が具足している人は、「加行成熟」円満な人間である、と言える。もし、機智、常識、正念に欠けていて、精進が不足するならば、これを加行敗壞 (payogavipatti) と言う。加行敗壞の状況の下、まさに：「成事不足、敗事有余」(成功する事少なく、困り事は多い)になる。優先的に成熟すべき善果は敗壞し、悪果は、無防備の状況下において、達成される。



## 智慧、精進、加行の重要性

智慧、精進、正念と加行は、そのどれ一つも欠けてはならない。これらの基礎が打ち立てられた後、その上に、博学多聞であるならば、あなたは、あなたの努力如何によって、功德の業果は、熟するであろう。反対に、加行敗壞の程度によって、同程度の不円満が到来し、非功德の果報を得ることになる。上述の状況に鑑み、満列法師は、以下のような詩を書いた：

（注1）加行とは、身加行、口加行、意加行を言う。身口意は正念、智慧、精進に相応する行為の表現であり、すなわち、加行と言う。

正覚者等、所説業本、唯従基準、作如是説、在此人界、欲得増長、財富資俱、長寿喜樂、智慧精進、是所依處。

古先賢言、勿因信業、入火坑中；或故闖入、有虎森林、若火燒傷、及入虎口、不宜譴責；命即如斯。

既不發憤、也無智助、憑籍單一、業力觀念：好也是業、壞亦業然！

如是依頼、是所不応。

応以智慧、觀察時地、人事機縁、決定進退、有所作業。

大衆宜応、牢記効法、漁夫手中、三魚（注1）差別。

業霉智淺、自暴自棄、神不助之。庸人愚者、自立図強、加神助力、諸所作事、隨所願求、順速成就。

不信業力、不信精進、愚痴人等、視諸衆事、一切皆是、守世間神、之所賜与。

或信梵天、毘濕奴神、大神通力、創世主等、創造世間、視為常法。此等皆是、世人通具、習而不察、無明妄見。

注1）三魚とは、経典の中にある物語、智慧ある一匹の魚と愚かな二匹の魚の事。

正覚者等、所説業本、唯従基準、作如是説。

いわゆる業とは、根本の根を、指して言う。仏陀は、「業」は、我々自身に属する財産だ、と言う。その意味はすなわち、我々は「業」を資本としている、という事である。

「業」は、羅望樹のように、もし、羅望樹の種子がないならば、羅望樹が芽を出すこともない（+のと同じである）。羅望樹は、羅望樹の種を主因としているが、しかし、単一の種があるだけでは、羅望樹が、芽を出すことはできない。種があっても、種を蒔かねば発芽せず、肥料を与え、肥沃な土地を準備し、十分な陽光、空気、水分などの加行助縁もまた、必要である事も、言を待たない。

多くの因と縁が具足されて初めて、羅望樹は芽を出すことができる；もし、成長途中の羅望樹を、ダメにしてしまおうとするならば、それは非常に簡単である。総じて、羅望樹に発芽させて、また、成長させる為には、羅望樹に必要な主因の上に、種々の加行精進の因縁条件を加えて初めて、羅望樹は、大きく育ち、葉を茂らせることができる。

羅望樹は、いつでも夭折してしまう可能性を持っている。我々の身体の樹もまた同じで、業が種子となって、身体は初めて成長することができる。しかし、身体は無常であり、何時如何なる時も、想定外の事柄が、発生する可能性があるのである。もし、しっかりと色身を保護しないのであれば、健康的に成長する事は出来ず、それはダメにされた羅望樹の枝葉が枯れるのと同じ様に、寿命が尽きる前に、夭折して死亡してしまうのである。

在此人界、欲得増長、財富資俱、長寿喜樂、智慧精進、是所依処。

これは、人趣と天趣と、異なるところである。天人は、智慧と精進に、依らない。というのも、天人は、彼が擁すべき幸福を、具備しているために、智慧と精進は、彼を利益して助ける必要が無いからである；地獄道と餓鬼道の衆生は、智慧と精進に欠けており、彼らの愚かさと同知、智慧は、増上する事はできず、ひとえに苦を受けるしかない；唯一、人趣のみが、智慧と精進を運用して、我々自身の人生を、改善することができる。財産の増上と、寿命の延長は、智慧、精進と加行によって、支えられるものである。

基本的な智慧——常識があつて初めて、健康的な飲食を料理することができる；健康的な食物があつて初めて、健康な身体を維持することができ、病痛を遠離し、寿命を延長することができる。故に、智慧、精進、加行の三者は、非常に重要な地位を占めるものである。子供が赤ちゃんの時代から、ゆっくりと成長することができるのは、父母の加行によって、細かいところまで、父母が子供の健康を、守っているからである。

例をあげて言えば；父母は、非常に熱心に、子供の生活、健康的な飲食に気を使っている。彼らは、どのような時に、子供が食事すべきか、洗面すべきか、薬を飲むべきかを、知っている。（+そのように保護された）子供が五歳くらいになった時、他の子供より健康であり；10歳くらいになった時、身体は同じく健康であり；15歳、20歳くらいになった時、また年老いた時、この子の一生は、病苦が少なく、非常に健康な生活を送ることができるに違いない。

我々は、更に一歩進んで考察してみるに、五歳になる前、父母が子供に与えた薬は、六歳になった子供の体内に残っているであろうか？ それはとうの昔に存在していない。しかし、薬のエネルギーは依然として、子供の身体の内、残留している。12歳になると、5、6歳の時に飲んだ薬は、すでに存在しないが、エネルギーは体内に残っており、その為に、子供は健康でいられるし、また、その健康が、子供の一生に、影響を与えるのである。我々の功德行と、非功德行もまた同じであって、昔に造（ナ）した功德、非功德行は、すでに消失してしまっているのではあるが、しかし、功德と非功德のエネルギーは、影のように、我々に付き従うのである。

もうひとつ例を挙げる：ほとんどの子供たちは、五歳になった後に、学校に上がる。よい教師に巡り合った子供は、6、7歳になると、よい教師に出会えていない子供より、非常に優秀になっている。彼らの学びえる知識と、教学の質は、非常に大きな差が生じるのである。故に、私は、基礎をしっかりと打ち建てるようにと、強調するものである。基礎の良しあしは、その後の彼らの擁するエネルギーの差異となるからである。基礎は、個人の人生に影響を与えるキーポイントである。

我々が、功德と非功德を造（ナ）している時、智慧と精進を運用する巧みさは、生命の輪廻にとって、重大な影響を及ぼすものである。故に、私は常に、力、エネルギーの重要性を強調しており、（+その内）発趣法への理解は、最も重要であると、考えている。たとえば：自然親依止の力によって、果報を造（ナ）す、また、業縁のエネルギーなど等。故に、

在此人界、欲得増長、財富資俱、長寿喜樂、智慧精進、是所依処

と言うのである。人として生まれて、欠かす事のできない要素とは、智慧であり、精進であり、正念である。

時、地、人を衡量する必要性

何かの事柄を為すとき、まずは先に「時節因縁」を観察しなければならない。が、この「時節」とは、一人ひとりの個人でいえば、「時節成就」に相当しないであろうか？次に観察しなければならないのは、己と交流し、付き合う事になる「人」である。すなわち、この人と付き合っ、己自身に利益があるかどうか？を衡量しなければならない。

「人」の自然親依止縁は、相当大きな影響力がある。仏陀のような偉大な人物は、非常に多くの衆生が解脱するのを助けたものである。それに反して、一人の悪劣な指導者は、人々に種々の苦悩を齎す。故に、我々は、時機と、共に集う人々を衡量し、比較しなければならない。最後に、「処所」（＝場所）も観察しなければならない。このよう

な所処は、我々にとって、得るべき利益があるであろうか？　このような国家は、このような利益を得ることができる；あのような国家は、あのような利益を得ることができる。以上の種々の事から、我々は、如何なる事柄を為すにしても、「時節」、「処所」と「人」を衡量しなければならない事が、理解できるのである。

ひたすら業のみを、信じてはならない。この一生の「業」が、齎すであろうエネルギーは、非常に小さい。上述した様に、一本の樹木が成長する因と縁は、一粒の種だけに求める事はできない。もし、種だけがあるのだとしたなら、我々は、それが大樹に成長することを、期待することはできない。種は主因ではあるものの、誰かが種を蒔かねばならず、十分な陽光、空気、水分も必要であり、また、不断に肥料を施し、面倒をみなければならぬ。これらの因と縁の条件が具足した時、樹木は初めて成長し、葉も繁るのである。その後、開花するべき時に開花し、結実するべき時に結実する。一切は、時節、処所、人等の多くの因と縁の条件を斟酌して初めて、よい成果と収穫が得られるのである。

己の命運がよい（業がよい）と思って、火坑に飛び込んではいならない。もし、あなたが火坑に飛び込んだならば、必ずや火傷するに違いない；猛獣の虎がいる所に近づいてはならない。己の業力によって、そこへ行く理由が分かっている、そこへ出向いたとして、虎がお腹を空かして、あなたを食べ物だと思ってかみ殺した時、己の運命を呪ってはならない。ある種の人々は、ある種の観点到固執して、一切はすべて業である、と主張する。良いのも業、悪いのも業。しかし、ひとたび、不幸が発生するや否や、すべては業——運命のせいにする。

というのも、彼の業（運命）が良くない為に、不幸が発生する。他の人々は不幸な運命を持ち合わせていないのだ（+等と言う）。（+こういう人物は）他人には、智慧加行、精進加行が具足していて、なんでもかんでも業（運命）のせいにはしない事、また、己自身の智慧、精進が、いかに薄弱であるかを知らない、のである；皆さんは、業力だけを信じるのは止めて、智慧と精進の加行もまた、運命を変えるキーポイントである（事を知るべきである）。

神は君を助けるか

もし、一人の人の、その業力があまりよくない時、また運氣もよくなく、智慧もなく、怠惰で精進もしないのであれば、この様な人間は、神も助けまいであろう。神が、彼を助けたいと思ったとしても、このような成果を期待できない人物に力を入れても、先天的な善の業力に欠け、また、後天的な加行の力も備えていないのであれば、神の名誉を損なうばかりである。もし、運命が良く、智慧があり、また精進する事を知っている

人間であれば、神は喜んで、彼を助けるであろう。一人の愚かな人間は、彼に三本の矢（＝緬甸の、希望を叶える三本の矢の物語による）を上げたとしても、何等の結果も出す事ができない。

故に言う：業霉智浅、自暴自棄、神不助之。

愚かで無知な人間

大多数の愚かで無知な人間は、運命がある事、智慧、精進の存在を、信じることができない。愚かで無知な人間は、世間の出来事は、すべて得か失、成功か失敗しかなく、それらは、毘湿奴天王が決めているのだと思っている。愚か者は、誰かと誰かが結婚するのは、婚姻の神、キューピットが決めたものだという。これは出鱈目な言いぐさであり、そういう事はあり得ない！ これは愚か者の認識である。実際はすべて、男性と女性双方の、思考と判断と努力によって進行したものであり、それこそが、婚姻の結果なのである。

その他の宗教における宿世業（注1）

昨日、みなさんと天（＝天界）について語っていた時、以下の事が話題になった：現代の、いくつかの強大な国家における裕福な人たち、彼らの一日の出費は、緬甸の富豪の一生の支出と同じである、と。緬甸人が一生使える富を、彼らは、一日で消費してしまう。彼らは、これほどに裕福であるが、仏教徒である、という事もない。それゆえ、彼らにはこのような疑問があった：仏教国の多くは発展途上国である。たとえば、スリランカ、ラオス、タイ、緬甸（ミャンマー）等。これら弱小の仏教国に住む人々は、最も遅れている者であって、我々は、この事実を、どのように解釈すればよいのか？ 皆も、思う：本当にその通り！

そして、その後、皆、心内は不愉快になり、もやもやとしてしまう。しかし、考えてもみて欲しい。あれら大国の富豪たち、彼らの前前業はどのように造（ナ）されたのであろうか？ 彼らにも已作業（過去世において造（ナ）された善業）がある。私はこう言いたい：仏陀の本生物語を読んでみて貰いたい。菩薩は、その時、その地において、波羅蜜を累積していた時、何回の人生において、仏世に生まれ、身は仏教徒であったであろうか？と。

釈迦仏が、黙語王（Temī）であった時、彼は非仏教徒であったが、しかし、彼は多くの功德を造（ナ）したのである。また令生王（Janaka）であった時は、彼は又、非常に多くの善業をなしたが、またもや、仏教徒ではなかった。黙語王の時、彼は非仏教徒ではあったが、道を修し、深い禅定を得ることがあった。

金職人 (Suvannassya) であった時、森の中で慈心を修習したが、その時の彼は、仏教徒ではなかったし、彼の父母も、仏教徒ではなかった。譚密王 (Nemi) の物語の中で出てくるアーラダ梵天もまた、仏教徒ではない。Vessantarā 王は仏教徒であったであろうか？ あの時代、どの法師が、彼のために法話をしたであろうか？ 誰も法話をする人はいなかったが、彼は外道の行者から、布施・供養を学んだのである。

### 功德の実践

身が仏教徒であって初めて、功德を造 (ナ) すものであって、他の宗教の者は、そのような事は実践しない・・・それは本当であろうか？ 菩薩は生々世々、その時、その地で波羅蜜を累積したが、その大部分において、仏教徒ではなかった。というのも、菩薩が波羅蜜を累積する、三大阿僧祇劫の中において、ただ 24 尊の仏が出世しただけであり、その他の時間においては、生仏にお会いする事が、できないからである。故に、みなさんに理解して頂きたいのは：菩薩は非仏世の時代に、不断に波羅蜜を累積した事実がある、という事を。故に、先ほど話題になった、あれら大富豪は、現代においては、仏教徒ではないかも知れないが、過去の輪廻の内に、彼らは彼ら自身の方式で、功德を造 (ナ) しているのである。

各種の業因によって、臨終の時にこのような境が出現し、彼らは裕福な国家に結生する事になり、かつ、彼らの父母も裕福であった、と言う訳である。彼らが富豪でありえるのは、彼らの国家が強大である事と、父母が裕福である事と、関係がある。彼らは、一生使い尽くせないほどの富を擁しているが、それは仏教徒でない事とは、関係が無い。彼らは、一生使い尽くせない富を擁しているが、彼らは、ただ只管、それらを楽しむだけであろうか？ 彼らは、彼らの過去世の業習により、彼らは己の財産の一部をもって、病院を建てたりする。

善業！ 善業！

彼らは、己の資産でもって、貧苦に苦しむ人々を助けようとするが、この種の善の行いは、慈悲から出ているものである。資金を提供し、力を提供して、学校を支援し、貧困家庭の学生たちが、高等教育を受けられるようにする。赤十字社を組織し、病院を建てる、学校を建てる、発展途上国を助ける。このような善業、善の力は、薄弱だと言えようであろうか？ これらの人々は、不断に前進しており、もし、弥勒仏出世の時代に、彼らが人として生まれるならば、彼らは、弥勒仏に会う事を、非常に喜ぶであろう； 仏陀に出会えば、彼らは四聖諦の法義を聞く事ができる。これらの人々がもし、智慧を具備しているならば、聞法するだけで、解脱の道に到達するかもしれない。また、この智慧は、未来仏 (弥勒仏の後の仏) の世の時に、解脱道に到達する為の、資糧になる



かも知れない。こういう事であるから、身が仏教徒である我々は、己を過大評価してはならず、謙虚に努力しなければならない。

仏教徒になりさえすれば、努力を必要としないと言って、出鱈目に日々を送っていれば、他人はすぐに、我々を追い越していくであろう。緬甸は、小さな国家であり、我々は仏教徒である。今、我々には、少なくとも食べ物があり、凍えてはいない。我々は食べ物によって、色身を滋養し、修行するのである。我々は、この因縁を善用して、不断に仏法を宣揚し、繰り返し薫習し、他の人々が成熟した智慧を得られるよう、助けなければならない。

(注1) 宿世業：過去の生々世々（の輪廻の内）に累積した業。

仏教徒であり続ける

仏教徒である私は、どのような状況になろうとも、私の信仰を変えようとは、思わない。食事が貧しくても、裕福になりたいが為、幸福になりたいが為に、私の信仰を変えるという事は、ない。飲食に関して、余りに貧しくて、油で揚げた豆しかなくても、私は仏教への信仰を捨てて、世間的な幸福を、追求することはない。我々の一生の支出が、かれらの一日分の出費より少なくても、私は、彼らと交代したいとは思わない。

なぜか？

我々は、世間の真相——

生苦 (jātipidukkhā) 、

老苦 (jarāpidukkhā) 、

病苦 (byādhipidukkhā) 、

死苦 (maraṇampidukkhā) を見たからである。

我々は確かにこれらを聞いたし、見たのである。我々はすでに、これら結生の苦、老衰の苦、病の苦を知っている。彼らはまだ知らないでいる。たとえ知ったとしても、彼らはそれを、重大事だとは思わない。彼らは、己の身に苦が発生しないように、只管、努力するだけである。世間には、愛する人と別れなければならない、愛別離苦がある；嫌いな人と共に住まなければならない、怨憎会苦がある。我々は、これらの苦に思いを寄せれば、知ることができる・・・輪廻路は久しく留まるものではない事を。このような認識から、世間に対して厭離智を生じせしめるというのは、外国の大富豪より、更によりよい生活ではないのか？ 彼らには、一生涯、このような智慧は、生起しない。



我々は、常にこれらの智慧が生起する・・・厭離智だけでも、充分彼らを、超越しているのである。仏陀は言う：地獄があり、畜生があり、餓鬼がある。我々は仏陀の話から、本当に畜生がいることを知る。そして、我々は、畜生が畜生であるのは、彼らの過去世における悪業が原因であり、それゆえに、今生は畜生に生まれたのだ、ということ信じると。

しかし、外国の大富豪たちは、信仰がない為に、これらの事柄を信じる事はないし、地獄も信じない。しかし、今、彼らは鬼（＝幽霊）の事は信じ始めたようだ。ただ、未だ確信を持たず、概念はモヤモヤしていて、納得はできていない。彼らはいまだ、懐疑の内にあるが、我々は、《吉祥経》、《発趣論》を理解できる段階にまで来ている。彼らは、歩み始めたばかりではあるが、しかし、彼らは必ず、我々の後に付いてくる。彼らは、鬼がいる事を信じ始め、人の死後の、次なる生について、考え始めている。

とは言え、彼らは歩み始めたばかりである。我々は《発趣論》を研究している段階である。双方の間の、この距離は、非常に大きなものがある。また、私が功德を造（ナ）す時は、必ず涅槃（nibbāna）の事に思いを致すが、彼らが病院を建てる時、涅槃の事までは、思わない。彼らの運が良ければ、未来において、仏に会う事ができる。我々はどうであろうか？ 齋食の供養であっても、我々は功德を回向し、涅槃の資糧（nibbāna paccayo hotu）とする。みなさんも、目標を涅槃の所縁において頂きたい。涅槃とは、仏陀の般涅槃の涅槃（parinibbāna）であり、シャーリープトラ、モッガラナーナの涅槃である。しっかりと覚えて置くべきは、我々の最終目標は、涅槃である事である。

あれらの大富豪は、これらの真相を知らないし、また聞いた事もないであろう。彼らは毎日、己のしたい事をして、食べたいものを食べる。しかし、我々はすでに、涅槃の楽を知っており、出来得れば今生において、涅槃を現証したいと思ひ、一切の功德はみな、涅槃の資糧とするのであるから、我々は彼らより、高級なのである。この高級なレベルの内にあつて、我々は更に一歩進んで努力し、純正な善士になり、一切の時、一切の地において、一切の悪法から、遠く離れる事（+が要請される）。我々は、彼らのような物質生活を享受する事は出来ないが、しかし、我々には慧眼がある。

我々は喜ぶべきである。我々は彼らより早く、涅槃を見ることが出来る。以上によって、《発趣論》に関して、理解しなければならぬ部分について、我々の理解は相当に進んだ。これらの法義に対する認識を踏まえて、みなさんが常に、己の心を正しく修することのできる人間、勇猛精進できる人間になるよう、祈願する。

Nān āppakāraṭhānāni, bodhit ānettha muninā,  
Anantanayapaṭhānam, vande anantagocaram。 (ママ)

礼賛

この甚だ深遠なる《発趣論》の内に、無上なる牟尼と称せられる大覚世尊は、因縁、所縁縁等の諸法によって、遍知一切知智を証得した後、一切の衆生にも、これらの法義を理解させんとした。私は一生のうちにおいて、この得難い殊勝なる想に出会う事が出来た。誠心稽首して、無辺なる智慧を具する仏智に礼拝して初めて、広大で甚深である《発趣論》に遊ぶ事ができる。

(翻訳終了)

